

7049

特11

488

笑話無尽藏

三遊亭日朝校一先
直規矩齋道楽笑話



091753-000-8

特11-488

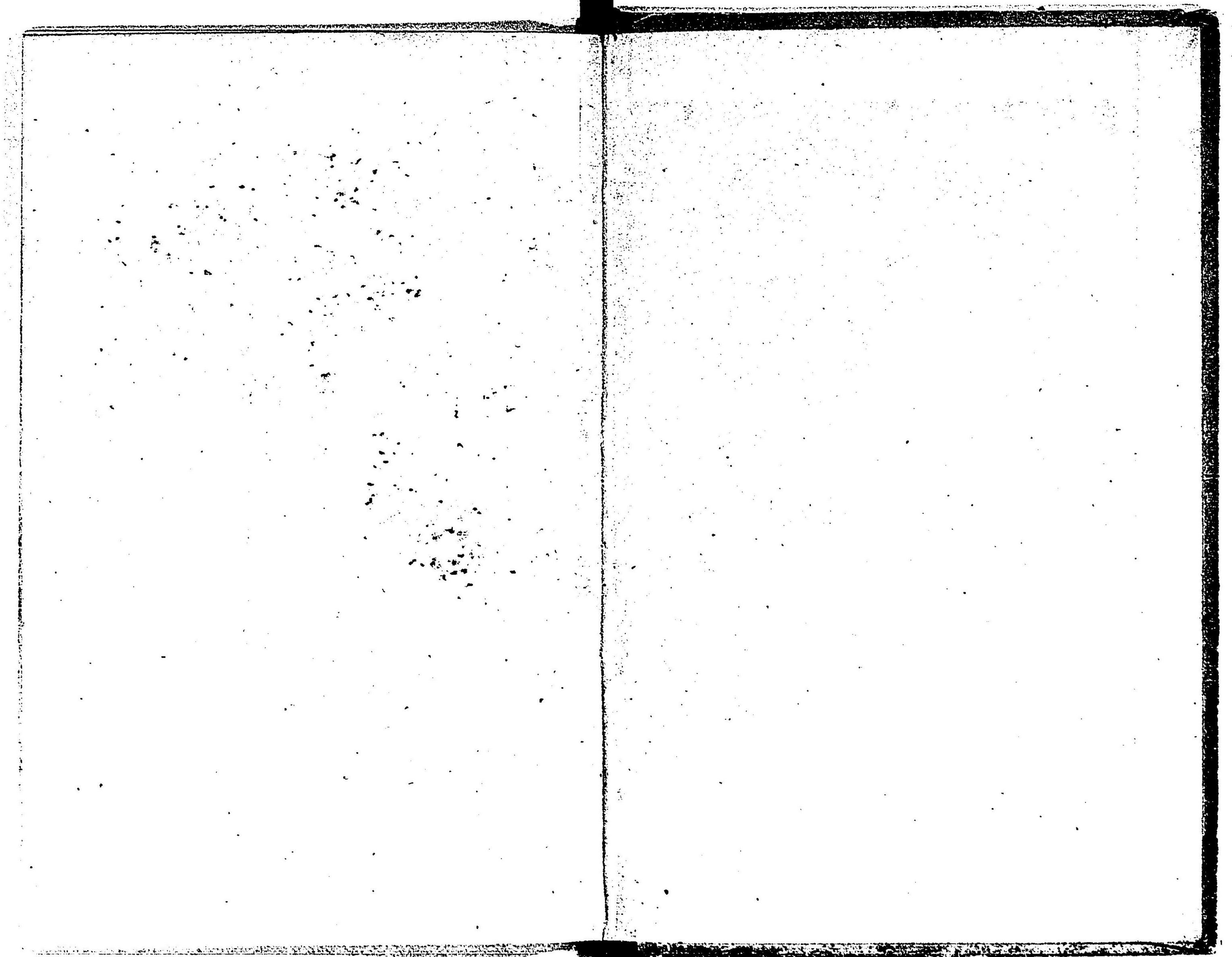
笑話無尽藏

真規矩齋道楽／編

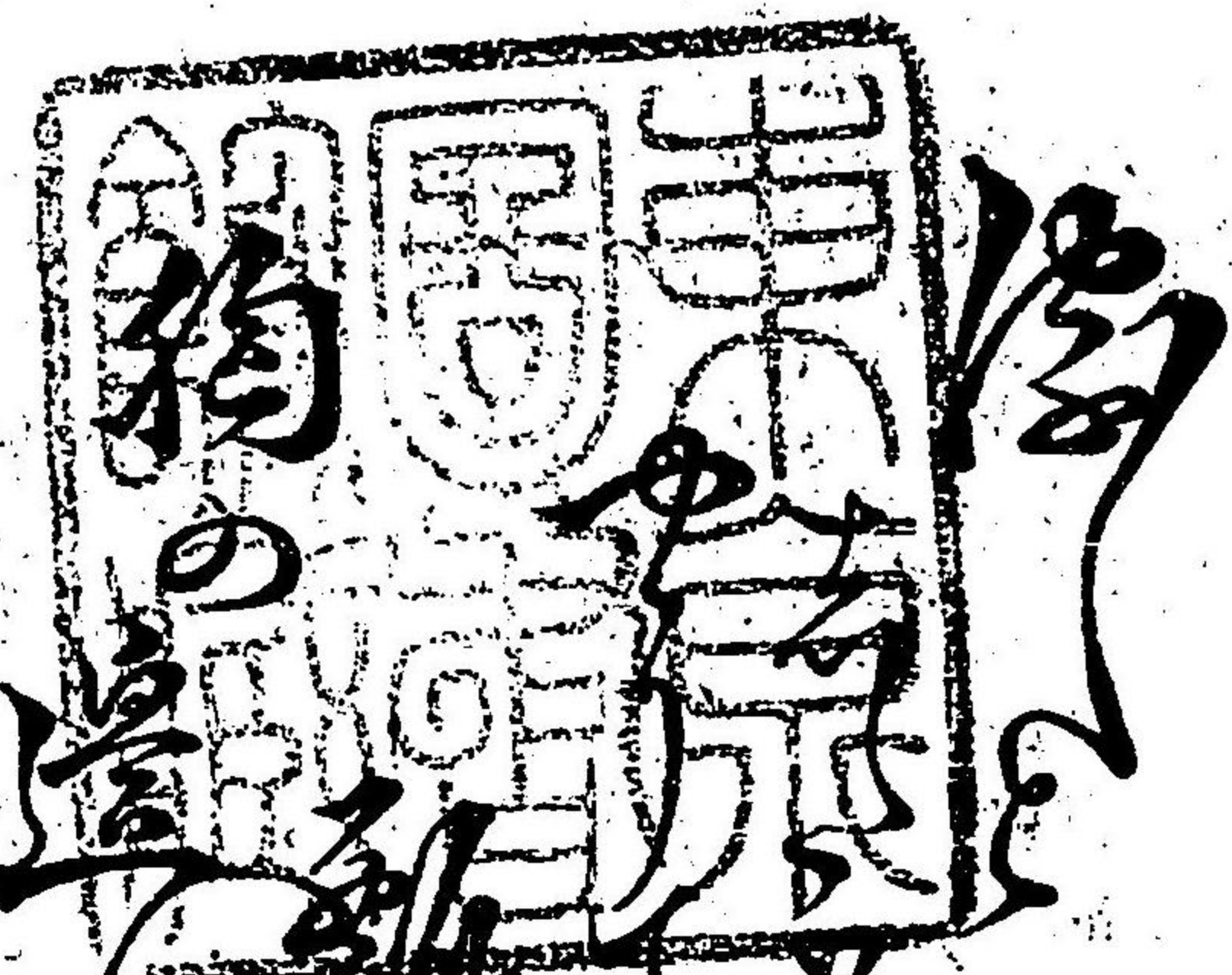
M24

DBO-0232





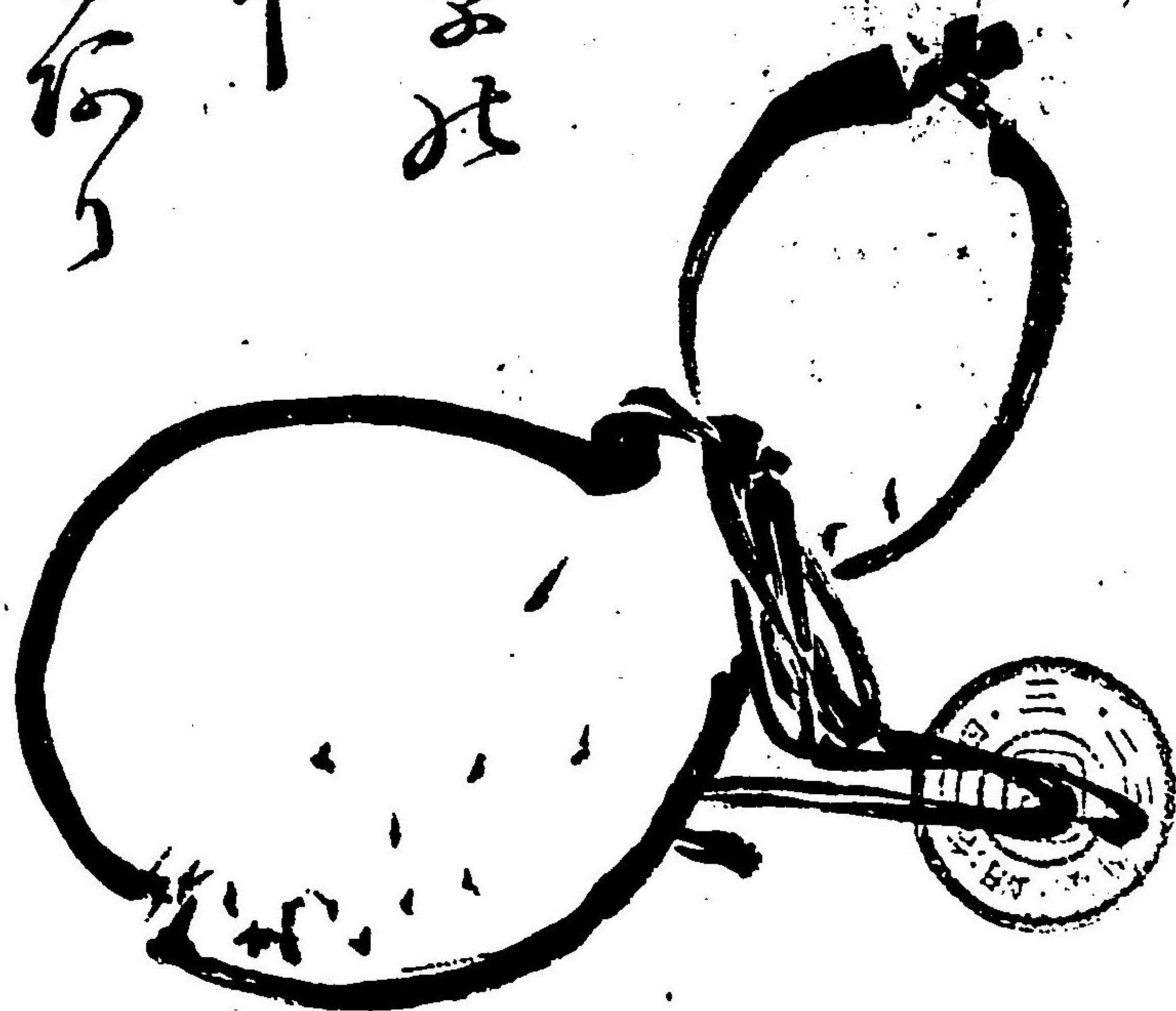
古歌



志乃糖屋何々

箱の邊へ平

熟菓子



笑話無盡藏戲叙

本草學者の平賀鳩溪戲述の假号風來山人戲作の自序に謂ふことあり味噌のみを臭きは眞の上味噌にあらす學者の學者くさきは眞の學者にあらす善哉々々當世の天狗社會が自惚高慢の鼻をひとぐ僧正坊の直言なる哉凡て時々の半熟生陳紛漢書に通じる者は字典玉篇の代言となりて文盲連に權理を釋さ新に蟹行蚊脚の文意を得れば西洋人の通辨に甘んじて知らずく外客の奴隸となり浮屠氏の經文を解する時は容体自然と抹香臭く我大日本の古事をあきらめ雅言に渉れば俗に疎く低阪中央ならぬを常とす癖中の僻ことさらになるは學者の學者臭さ此臭氣止を如何せ



二
ん善あし引のやまどの老儒増山守正翁ときこえは轉るやから
學の道を分け四角四面に奥を探り胸中万巻五車に積み才識八斗
を貯ふる老先生と雷名西京浪花に轟き昔日入徳の門校生徒蟻集
隆盛なりとも性滑稽を含蓄するより金馬門に避る格にて西から
東へ上京以來學者の匂ひをさらりと拂ひ駿河臺の高丘より下情
の低きに眼を配り其説天下の輿論に歸する大筆の勞を憩め悦た
風調に此の如き戯述あり學者の諧謔堅からうと思ひの外なか
く以て和かくして齒に着かず養老の飴みづから味ひ從來落語
家のもなと家臭き笑話の癖のあくを抜き純粹改選の滑稽糖まづ
その風味を試みて守正翁が手製の熱心と眞のお菓子實に可笑と

お臍でお茶の抱腹どおあしまつ風

假名垣魯文漫述

自敘

傳曰。滑稽者俳諧也。俳諧者清通也。蓋滑稽之至要。當以清通爲主。而斷不取乎淫猥之事也。世有滑稽落語家者。流能吐人情世態人之所難言。其言輕妙。懸河不啻。使人抱腹絕倒。亦可謂一種之奇藝矣。雖然其弊或度淫猥。會場聽者。非無親子發赧。姊妹掩面者。余深惜之。因欲高尙其品格。以爲開明之具。於是不自量。竊寓隗始之意。勉刪除淫猥鬧熱之語。專纂清通洒落。可以資道德風教者。編爲一書。名曰笑談無盡藏。於是乎盡之赧然掩面者。莞爾含笑。後之誦之者。亦有以和樂怡

顔也。是爲序。

明治二十三年四月。丹波丹蓉增山守正。撰於東京駿臺鈴木街倚居。

改選滑稽 笑話無盡藏

例言

- 一 此書は。世の事故ありて。學問する能はざる幼童。及び婦女等として聊にても開智の域に進めんと欲し。滑稽文中に。教訓の意と寓し。古今賢哲の確言と引用し。毫も厭倦と生ぜず。知らず識らず笑ひながら善道に誘導するの目的にして。之に次ぐに鬱憂家の神氣と舒暢發揚し。又は苦學者睡魔と驅逐するの器具と爲さんと欲す。而して其行文の體裁は。先づ隗より始むるの微意なり。
- 一 文中。務めて閨門淫猥の醜句と除き。専ら清通洒落の語言と主とす。故と以て親子姉妹の別なく。共讀。同誦して。莞爾笑と含むの功あらん。
- 一 余。元來滑稽者流に非ず。唯公私の邊に乗し。該場の説話と聞き。深く感ずる所あり。此と以て其話と淘汰折中し。挾むに賢哲の金言と骨子と爲して編輯せり。

一 行文の體裁は。該者流の談話と。聞くに従ひて記す所あり。取捨して用ゐる所あり。畢竟其便宜に従ふ。其意唯閱者の厭倦と除きて。賢者の金言と覺了せしむるに在るのみ。冀くは閱者此の笑具の戲謔のみと取て。篇中の本旨と爲す勿れ。

一 滑稽は。假に愚者と設くるに非ずんば。談話の笑具と爲す能はず。此故に通篇愚者と以て。笑話の器械となすと雖も。世上眞に此の如き愚者有るに非ざるなり。看客須く篇中の骨子たる。賢者の確言と體了すべし。而して徒に邊幅の滑稽戯文と以て。通篇の主旨と爲す無くんば。則幸甚し矣。

編者識

笑話無盡藏目錄

- 笑話の種類
- 無筆と無筆
- 引導の頓智
- 禮儀の相違
- 老人の同行
- 手洗の間違
- 菖蒲賣
- 神佛の歸一
- 狗猿の相違
- 妻女の失言
- 地獄の夢

笑話無盡藏目錄終

- 体盡し
- 枕賣の危難
- 長吉の機轉
- 幫間の腹針
- 遺言の遁辭
- 妊娠の祝杯
- 放屁の遁辭
- 眼球の失敗
- 火災の誤認
- 喰捨の酬石
- 井邊の會議

笑話無盡藏

三遊亭圓朝校閱
眞規矩齋道樂纂述

○ 笑話の種類
 笑話とは落し話と云ふ事、今一寸その例
 を舉て見ませうなら「眼のら出るものは涙」と之と一口落しと云ひ、又「お中と云
 ふ女が道の真中と通つて居ると一人の亂暴者が刀を抜て突然に天窓の腦頭をらザッ
 ンと切てお中と真二ツに致しました、ヌルと彼方へもヤシ此方へもヤシ」と
 之と文字落しと云ひ、又「一人の旅人が或茶屋の前と通行するとき腰に附た褌口と
 ハメリと落すと茶屋の女が行成り駈出して来て旦那支度はと云ひました」是で一
 ツの話しになるのですが是は腹が減たから帯が緩んだ帯が緩んだから腰に附た褌口

が落ちたと云ふ理屈で之を考へ落しと云ひ又「關の地蔵が奈良の大佛の處へ嫁に来ましたヌル」と其晩町内火の用心と嚴重にすべしと云ふ觸出しで大勢の消防夫はソレと云へは直様繰出す氣でメツカリ火事支度の出立ち、夫に高張提燈小提燈龍吐水ポンプ梯子鷲口に至るまで残らず取揃へ彼方でもカチ／＼此方でもカチ／＼と柵木と壁て火の用心／＼と廻つて居るのら人々は不思議に思ひ火事も有も仕ないのにナせ此様に騒ぐのだらうと云ふと或人の云ふには夫や知れた事今夜は石と金との出逢だの「ど之と理屈落しと云ひ、又「コレ／＼其荷物が重けりやオロシア無理に持たないで止にシナイやツヤパン持て行ふお前さんもチベツト持てお呉れ、夫が嫌ならインアリヤ、オイ／＼其様な處に捨て置なさんな、人がトルキスタンで數がベルシアお前さんも物と大事にする心がアラヒヤア確と片附てモロッコせ、僕の意見に氣がアルセリアなら泥坊のトルホリに逢ないやうに地理と考へて用心よく彼處へ送ツてイギリスが宜、グツ／＼して居る内にアメリカがフランスさあ／＼些とも早く／＼、

誰も居ないの事はしたり誰もオランマ」などの類これと地名落しと云ひ又一丈二尺の喧嘩と一寸の仲裁で済したと云ふ話しが御座います夫は全体どうしたのだと云ひますと「昔し或大名の六尺と六尺とが喧嘩として已に大事件に成らうとした處へ某人が仲裁に這入て双方に怪我の無いやうに取計らつて五分／＼で済だのら合せて一寸だ」と之と寸尺の落しと云ひます其外また色々の話しが御座いますすけれども先づ此位にして置て扱是より其笑話とお聞に達しませう

○無筆と無筆

某田舎に凡太郎と出愚助と云ふ二人の怠惰者ありしが此二人は元來無學文盲にて、いろはのいの字は右のら書ものやら左のら書ものやら其順序さへも知らず、筆と持のは灸とすへる時は有り、平生は唯飲事と食ふ事と朝寐と晝寐とお負に晝寐と事とし、世に云ふ仕事幽靈飯辨慶で雷様が眼と廻したやうに彼方ではゴロ／＼此方ではゴロ／＼と、ゴロ／＼寐轉んで果報と待せ果報は來ず、ワングリ口と開て棚の上

と睨んで居ても棚のら牡丹餅も落ちて来ない處のら、強腹粉れの糞焼飲み、前後忘却
 ドロンケン舌頭は廻らず眠が廻り人三化七千鳥足、何國と當の目的も思案も無し
 無鉄砲、浮々と歩行て来るは来たもの、右と左の追分道に困り果て 出愚助「クレハ
 ア凡太どんやお前がハア行へエ行へエチウのら何處へ行んだの知んねへけんぞ自己
 もハア旅は路づれ世は情だアと思つて一所に此處へまで出掛たアだが是のらハア右
 の方へ行たアの左の方へ行たアの何方へ行のだヤー 凡太「お前何と云ふのだアお前
 が行へエ行へエチウのら自己も出て来たんだアが何だのらチウて今アお前其様な事
 チ云つたアのらチウて仕方がねへら右イでも左イでも何處へでもハア行へエや 出愚
 何處へでもつてハア全体右イ行やヤア何處へ行て左へ行ヤア何處へ行のだ 凡太「
 何處へ行たアのハア其處に追分の碑があるのら讀で見ねへな 出愚「是がハア讀る位
 ならお前疾くの昔し學校の先生様に成て居るだアが些とも讀ねへのだから感心だア
 ……お前讀で見ねへな 凡太「自己もハア何だの見當が附ねへんだが何だい出愚兼お

互に此様な肥大身体と持て居てへ是ンベエの字がハア讀ねへチウなア何と此開化の
 世の中に生れてへ情ねへ事ぢやねへい 出愚「ホンによ情ねへ事だなア 凡太「お前
 も情ねへとハア思ふならア是のら寧ろその事に東京へ出奔つて學問チウものヲ稽古し
 てヨ太陽様の何で此世界へ墮落さッしやらねへんだの又何で此世界に居る時と寒い
 時とがあるんだの又何で翠玉の袋の縫目の綻びねへんだの又何で身体が垢が半風子
 に化するんだの此處等の筋道とばハア能く覺へて學者だアとの役者だあとの云ふ者に
 成るべエぢやねへ 出愚「宜のんべエ自己も爾しベエ…爾しベエけんぞ夫にして
 もハア右イ行て宜だの左イ行て宜だの分んねへぢやハア困つたなア、と二人で當惑
 として居る處へ向ふのら角力取が大手と振て天下の力士の自己一人小錦糞と喰へ大
 達屁でも嗅と云ふやうな勢ひで遣て来るのを見て地獄で佛と二人の喜び此人に依て
 文字と聞て見んものと出愚助の小腰と屈めて力士に向ひ 出愚「クレハ其處へ行ッ
 しやるお關取様ア自己等アはあお前様と男と見掛てお願へ申してへ事がありますだ

アが何と聞て呉ッしやるべエの、と云へば力士の思ふやう男と見掛て自己に頼みが
 あるとの此奴ア只事ならずと早呑込み 力士「ヤア我と男と見のけて頼むとの、了
 解た皆まで云ふな百も承知二百も合點、三百の尻暮代言の極り相場四百の上下揉だ
 按摩の儲け、チャーンと羽織の紐で胸に在り角兵衛獅子の太鼓で腹に在るぢや、我
 の疾くに見て取た定めし足下達やあ何のの間違のら親と殺され其仇敵と討てへど彼
 の講釋師が云ふやうに野に伏し山に臥し雨に浴し風に梳り、辛苦艱難せし鬼神の
 助けの佛の手引の、今幸ひに時來り俱に天日敷のぬ、尋る敵に廻り逢ひ、盲龜の浮
 木優曇華の花も開のん場に臨み、彼奴の劍道の達人此方の芋堀の親玉、迎も手にも
 齒にもオへねへのらソコで男と見のけて我に加勢助刀として呉との頼みぢやらう…
 …承知仕やんした義と見て爲さるの勇なしぢや足下達が男と見て頼むなら我も男ぢ
 や助太刀として敵の生首と引て抜て進せやせう、と腕捲りして力味返れば凡太郎出
 愚助の兩人は膽と潰し 凡太郎「レハアお關取様ア其様に威張腐らねへで些んハハ氣

と落附て呉ッしやれ自己等がハアお願へ申すチウなア其様な敵討や喧嘩の相手ぢや
 ア有ましねへだ、と云ふのと聞て力士は間拍子悪く 力士「夫だら足下達が我に頼む
 と云ふなア敵討ぢや無ふて何の頼みぢやい 出愚「何よ自己等がハアお願へ申し度ぢ
 ウなア外の事ぢやアありしねへが自己等アハア是のら東京へ行ハエと思うだけん
 必右イ行て宜だアの左イ行て宜だアの了解ましねへのら其處に突建てる追分の碑が
 讀で貰ひ度だ、と云へば力士は面目無氣に頭と掻き 力士「ム、再かいナ其奴ア我が
 早まり過た、と云ひながら追分の碑の前へ進み寄りて左も物知らしく文字と眺め力
 士「ム、成程なア旨く上手に書てあるワ成程なア能く出来チヨるワ、小野の道風情
 の速勢源の義經武藏坊辨慶弘法大師西行法師楠正成阿部の清麿も斯は出来まい
 イヤ此奴アどうも能く出来チヨる、と頻に感心して居る様子に二人は退屈し 凡太郎
 お關取様ア自己等アハア字の上手下手と聞のぢやアありましねへ東京へ行なア右イ
 行て宜だアの左イ行て宜だアの夫とハア聞ますだア 力士「ム、東京へ行く道のい東

京へ行道は此右の方と眞直に行て若し東京へ出られ無つたら直に引返して来て又左の方へ行て見るぢや爾して左の方も東京へ行無つたら又引返して来て誰の物知りの人に聞て見るべしと書てあるぢやト云ひければ兩人は呆れ返り暫くは目と見合すばりなりしが 出愚「ッレハアお關取様アお前様も此字が讀ねへのだんべエ其様な字の讀方チツがあるべエの是のらハア些と學問ノウさつしやれへれ前様のやうな字と知らぬへ人と自己等が處ぢやア陳奮勸左衛門安藝守之助なんぞチツだアと嘲り笑へば力士は猶も撥らね顔 力士「ヤア足下達やア何と云ふのぢや自己やア此位な字はお茶の粉で讀のぢやが此頃は夜盲の病があつて讀ねへのぢやト云へば兩人は猶々失笑て 凡木「お關取様ア其様な空ア云ふたアのらッて無益だア夜盲チツものア日の暮のら見へねへのが眞實の夜盲だア今ア是れ未だ正午前だのに夜盲で見へねへチツ事があるものゝい（編者曰く眼病に遠視眼あり近視眼あり又夜盲なる者あり序に依て聊の醫に聞し説と申すべし抑く遠視眼は眼球の常よりも前後に扁平なるに因り

或ひは割に小さきに因る近視眼は眼球前後に長く延びて其形卵圓なるに因る而して生れ付ざるに近視眼あるあり又常に近視するより發生するもあり夜盲の症に至つて網膜視神經質の麻痺遲鈍或ひは暗弱失常によるより起る病にして晝は日光強さるる網膜映射苦にならず日の光り地下と照すとさ其感觸の夜に入て殊更鈍る故ならんと云ふ） 出愚「夜盲なんぞだアお關取にも似合ねへ卑怯だア是のらアチト讀書に精と出さッしやいと云へば力士は負ぬ氣で 力士「ナーニ讀書が出来なくッても苦しう無いぢや世に其名も高き菅原の道真公でせへ讀書が出来ねへで流罪とまで成らしやッた位だのら況て自己等が讀書の出来ねへなア些とも恥しい事アないぢやト云へば兩人の腹と立て 凡木「お前様ア何と云はッしやるだア道真公が字と能く書アしやッた事ア誰でも知ッて居べエぢやねへの夫にヨ自己等ア學校の先生様に聞て知ッて居るだアが道真公の流罪に成らしやッたなア藤原の時平が讒言ノウしたのらだア夫とお前様ア字と知らぬへと云はッしやるなア何の証據があつて云はッしやるのゝい

力士「爾ぢや其説言が字の書ねへ証據ぢや 出愚夫や又何故だア 力士「知れた事ム
ヒツ(無辜)のらぢや

○引導の頓智

拙藏魯吉と云へる兩人あり、朝のら晩まで毎日く飲や誦への散財に、未進の山に
借金の淵に糠なる其糠に、釘鏝も利ばこそ、遂に身代棒に振り、振り廻されぬ處
の暮、節端詰つて隨徳寺、三界坊の當なしに歩き勞れてオイ魯吉、手前と自己とは
子供ら、友達となる因果にて、自己は正直發明に、生れた者と情なや、手前の様
な阿房とば、友に持たる不運さは、ツイ朱に交り赤くなり、故郷はなれて脱走と、
成りしも元は手前ら、思へばく變念と、皆で云はさすコレ拙藏、其怨みこそ
此方で云ふ事、水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友に因るとの云ふ古語あり、人は
天性善にして、幼きとき拙坊は、善子だ素直だ賢いと、譽られたのと手前のやうな
馬鹿な野郎の穀潰し、放蕩者の怠長と、友に持たる悪縁で、牛に牽れて隨徳寺、雲

水の身と致せしは、皆な手前の指南ら、然るに自己に罪と被せ、手前一人が善願
と、仕やうとするは何事ぞ、畢竟是は互ひに、身勝手と云ふ滅す口、犬の遊吠同
前の口争ひは無益なり、元來同性相應じ、同氣相求るのら、自己と手前の其中
に一人善があるならば、善惡兩立せざるなり、到底は同じ阿房馬鹿、二天作二ツ
割差引なしの勘定だ、今更悔ても及ばぬ事、破れ被れの成行と、斷念たらば事足ん
、只此上は留意なく生死と共に契らんと、目的もなく歩み行く、折るら日足も西に
落、鴉カアく樹左衛門も巢に返ると見て 拙「オイ魯吉イ斯して二人で當もなく歩
いて居たのらッて仕方がねへが全体今夜は何處へ寝る積りだ 魯「さうサ何處と云ッ
て別に當もねへら構ふ事アねへ野宿と遣のさうぢやアねへら 拙「野宿たアさうす
るんだ 魯「さうするんだッて手前は野宿と知らねへの 拙「知らねへのら聞のだ 魯「
野宿と云ふなア雲の天井に山の壁よ夫ら草と蒲團にして石と枕に野原へ寐る事よ
拙「さうの野に寐るのが野宿なら山へ寝れば山宿谷へ寝れば谷宿田の中へ寝れば田

宿畑の中へ寢れば畑宿か夫ぢやア一寸石に腰をうけて石腰宿と遣ふの「語らねへ事と云ふない借金取に追掛られる落武者は犬が吠ても吃驚するなら酒落處ぢやアねへけれど」掛乞ひも提燈の弓押張て穢し返せくと云ふ」と云ふ狂歌と思ひ出したがナント面白い句ぢやアねへの「拙」面白いなア宜がナント日が暮て心細いぢやアねへの彼の向ふの森の中でオー〜と迂鳴て居るなア何だらう「さうさなア彼やア何だらう……、了解た彼奴ア狼に違へねへ」拙「ナニ狼だと其奴ア大變だと駈出せば魯吉も續て駈出す其後より四五疋の狼がオー〜〜〜と迂鳴ながら附て来る二人は此處ぞと一生懸命倒つ轉びつ今ぞ知る、憂も辛さも旅の空、親の廁で糞垂た、罰は眼の前やう〜と、一里餘りも逃延て向ふと見れば山の中、火影一點閃くと、力便りに廻り来て見れば、古ひし禪寺なり、二人はヤット生心地、一寸お頼み申しますト案内と乞へば一人の老僧出來り 老僧「お前さん方は何方の」と尋ねれば二人は旅の途中にて 狼に出逢ヤット此處まで逃來れり願はくは一夜の

宿と許し給へと只管歎けば和尙は憐み、夫は嘸もし御困難辛苦の情と深察致す、心と安く宿られよと聞て二人は轍魚の水、足と洗ひて身と清め、席へ上れば和尙は仕度と調へて、晚餐食せ其後に二人に向ひお前さん方は國は何國で何方と指て旅立とせらるゝと問へば二人は面目無氣に頭と垂て居たりしが説破詰りて頭と擡げ「拙」自己共の身の上をお尋ねに逢まして誠に面目次第も御坐りやせん元來自己等は東京の生れ何とのお隠し申しやせう恥と云は無さや理が分りやせんが此二人は子供の時から野良倉遊びが身の癖と成りやして色と酒とに現と拔し先祖代々傳はつた地面も家も諸道具も二束三文に賣拂ひ其上借金で首も廻らぬやうに成りやした處から據ころなく二人して何の當途もなくブラ〜と出て参りやしたので御座りやすと懺悔話しに慈愛の和尙、憫憐の情彌増り、愚痴なる者の向ふ見ず、血氣狂ひの不便さよ、人間僅の五十年、夢の浮世に生れ来て、鬼窟の裏に活計と施す事の拙さよ、人々具足固有せる、眞如の月と見つけ出す、工夫はせず外物の欲に迷へる淺穢さ、果は

三界坊になり雲と水とに身と任せ、所定ぬ無宿者、哀れと云ふも愚なり能くく
 觀じ知らるべし、簀笠主人の云ふ通り、夫三界は火宅なり、穢土に住て穢土と知ら
 ず、私欲に耽りて私欲と思はず、愛憎に因て輪回あり、好惡に因て煩惱多あり、四
 大元是れ何國よりの來る、惟みれば悉皆空なり、十惡何れの處よりの致る、願みれ
 ば一妄想のみ、此故に諸佛惡趣に出現して、濟度に違なしと雖も、凡人は無邊無數
 なり佛縁なき者は無佛世界に生じ、佛性なき者は畜生道中に落つ、實に生ある者は
 必らず死あり形ある者は滅びざるなし、機縁既に滿る時は太陽の没するが如く、積
 氷の消するが如し誰の一人留まる者むらん、斯れば早く一身と天堂に歸し納めて、
 彼岸の禪定門に入こそ善けれとある如く、希はくは二人共、佛門に入りて研究し、
 樹下石上の功と積み、直指人心見性成佛の、悟りと開くが肝要ぞ、お前方も出家し
 て菩提の道に入るべしと、懇々説諭なしければ、旅費さへ持ぬ窮鳥の、尾羽打枯す
 時なれば、途方に迷ひ詮方も、盡て焼のら出家せん魯吉は如何にと尋ねれば、「さ

うさなア旅は道づれ世は情と云ふのら手前が坊主になるなら自己もお交際に坊主に
 成らうヨ都々一にも「情死しましよの髪切ましよの髪は生物身は賣」と云ふ事があ
 らア頭の毛は剃て仕舞ても復た生るが身体は大事だのら飢へて死ぬよりの坊主に成
 た方が増だらうト云へば和尚は笑つて 老僧「焼のらの出家交際の出家も仕ないより
 増だらうドレ」出家得道の戒と授けて剃髮して進せやうと本堂の諸佛に拜と致さ
 せて雪堂禪師の偈と述る、其偈に曰く、
 白雪諸嶽と埋めども、青山本不動、差別の色法妄りに去來すれども自性なし、人
 我の魔軍八万四千の亂賊、高慢の旗高く、別山頭に翻へせども、本覺柔和の聖都
 には、知勇の猛將數百萬の剛兵あり、幻兵如何して眞空城と襲ふ事と得んや、嘆
 患の急箭も忍辱の楯と洞さず、無明の痴窟暗々たれども、阿字の慧日鎮長に照し
 煩惱の黒雲洞口に起れ共、菩提の峯には清風颯々たり、三毒の劍林森々たれども
 般若の智火燒盡す、六欲の臭煙施風すれども、三密の栴檀恆に薫す、五塵の濁水

横流すれども、性海甚然として常に澄々たり、

本來無一物 何須修證功、

涅槃生死夢 堪笑白日空、

喝、と唱へて剃刀と取り拙藏の髪と剃んど爲しければ拙藏は驚いて一生懸命に両手で頭と抑へて待て下さいと待て下さいと逃廻ると和尚は靜に諭して 老僧「コレ」拙藏能く得心とするが宜、一子出家すれば九族天生するとあり、お前は一旦承知しながら卑怯未練にも逃出すとは何事ぞ、此處へ来て早く剃が宜と云へばやう／＼の事を得心し、然らば髪と剃るべしと、剃刀と出せば又兩手と出して抑へる、剃刀と引込せば手も引込る、又剃刀と出せば又手と出す、互ひ違ひの果しなく止るのうと云へば剃と云ひ、剃ふとすれば止ると云ふ、和尚も殆んど持餘し、或ひは怒り或ひは諭し、ヤツトの事で得心させ剃刀と出せば又手と出すと和尚は掴まへて殿しく意見なしければ 拙「それぢやア清水の舞臺から飛落た氣で思ひ切て剃と致しやせうと云

ふと和尚は笑ツて 老僧「扱々仰々しい覺悟だマア何でも宜早く剃ませうと云ひながら忽ちクリ／＼坊主に剃ければ拙藏は其剃落した髪の手と手に取て 拙「イヤ是はどらもお珍しい其癖ツイ御近所でありながら目に懸るは今日が初めて何分この後ともお心易く願ひやすト眞似目腐ツて云ふと聞て和尚は呆れ返りクツ／＼笑ひながら魯吉の頭も所斑に剃落し夫より名と附て遣んとて拙藏と道祐、魯吉と厚祐と名ければ二人は之と辭退して此名は止て貰ひ度と云ふもゑ和尚は其理由と聞ば 魯「ナせだと云ひますれば仰しやる通りに名にすれば手前はドウ云ふ自己はカウ云ふ道祐厚祐と屹度暗嘩の本ですら外の名前に換て下さい 老僧「色々な事と云ふ夫ぢやア斯しやう拙藏と道純魯吉と妙純サア是なら宜のらうと斯名と附て日と送る中、和尚は法用ありて遠方へ他行するに臨み二人と呼で云へるやう 老僧「自己は是のら少し遠方へ行て来るのら留主中は氣と附て呉れ若し檀家て新亡があつた時には隣村の道樂寺法當和尚に引導と頼むが宜と云ひ置て出行しが折のら村に死人あり明日午後の

第二時に葬儀とするとして頼み來れば彼の兩人は密談し師の命なれば道樂寺法堂和尚
 小依頼すべき筈なれども斯する時は肝心のお布施と彼奴に占領らるゝこそ誠に残念
 寶の山に入りながら手と空しくして傍觀するも氣が利されば我々往て用らはん左す
 ればお布施は折半け一杯飲る旨しと談しが終決り既に其日となりければ道純師
 僧の代理となり妙純と伴て新亡家轉利頼四郎の宅へ行き出もせぬ咳と無理にエヘン
 とせきながら悔みと述て座に着ば長男頼太郎は位牌と持出で 頼「お手数様ながら戒
 名と一ッ願ひますト云はれて道純は當惑したれども眞逆に戒名と附る事は知らない
 云ふ譯にも行ざれば何と云して胡麻化さんと思ひ其方此方とキヨロくと眺める中
 ント床の間の壁にのけたる賣藥の袋に伊勢朝熊万金丹と記し 傍に細字く白湯にて
 用ゆべしとありしと見て道純は幸ひ之と戒名に附て遣んと鹿爪らしく筆と執り伊勢
 朝熊万金丹信士と記し夫切で止ば宜に小書の白湯にて用ゆべしとある但し書までも
 認め夫より讀經の時となりたれども未だ經文と知らざるゆゑ是に亦た閉口したれど

幸ひ東京の町名と少々知ッて居れば之と不分明やうに迂鳴て讀經に代んと思ひ附さ
 頻にチーンと鈴と鳴して早口は 道純「ア、ア、ア、銀座鍋町柳原大傳馬小傳馬
 南傳馬町本町室町日本橋通り一二三四丁目深川名物花輪糖淡路島通ふ千鳥の戀の辻
 占、南無阿彌陀佛くくく」と出鱈目出放題と唱へ終り珠數と爪探り座に着けば
 親戚の人進み出て道純に向ひ 某「和尚様、一寸伺ひますだア此戒名は何と讀ますだ
 アと問へば道純は澄アし込で 道「夫は伊勢朝熊万金丹信士と讀のサと云へば其人は
 妙な顔として 某「へー伊勢朝熊万金丹信士……何だの聞たとのあるやうな戒名
 で御座りますトウ然して其戒名の傍に白湯にて用ゆべしと書てあるなア何の事で御
 座りますト尋ねられて道純は是奴ア失敗たとは思ッたが猶靦然顔にて 道「夫やア
 茶湯には及ばないと云ふ事だ

○禮儀の相違

某處に金尾持助と云へる人ありしが折柄舊曆の八月に當れば明月良夜と賞せんとて

日頃出入の佐藤甘藏熊野井苦助と始めとして夫茂惣太何尾勇藏小松田琴太など云へる者共に月見の案内と爲しければ案内と受たる甘藏苦助その他の人々は甚だ迷惑に思ひ俄に集會と催ふして相談となしける時佐藤甘藏の云へるやう當時の日々開化に進む世の中にも似す我々共の因循姑息布告も讀ぬ後悔は先に立す、唯先に立のは提燈と持たればのりにて其他は何事も人の尻に附とは誠に残念、雪の道と鳥汁ならば跡のらの方が勝利と得ると聞て學問に出後れたるは愚の至り今となりては泥坊見て繩と綱より未だ至急、今月今日の今夜金尾家の酒宴に案内と受たれど禮儀と知らぬ愚民ども錦の席へ蝦蟇の出で蠢く如き不都合は恥の上塗り出る杭打れ面目灰に塗れなく、咬へ烟管で胡坐より外に出来ない我々が七重の腰と八重に折り綺羅錦繡の其上に珍重せらるゝは有り難迷惑、去ながら皆一同に断る譯にも行されば遠き思案の無き時は近き憂ひのあるは必定、因て思ふに幸ひ近所に博識の高井鼻藏と云へる先生あり彼の先生に依頼して禮儀の指南と受ては如何にと云へば皆一同に手と打て成

はど夫は名策なりと談し忽ち一決し夫より一同に揃ひて高井鼻藏氏の宅に行て案内と乞へば高井先生は自ら出迎ひ 高井「コレハ」諸君達には宜こそお出下されたア先づ是へお通下されいと客間へ通し扱諸君がお揃ひにてお出下されしは何の御用向で御座るの承せはり度と云へば皆頭と下と禮と爲し 甘藏「ハイ今日大勢揃つてお宅様へ伺ひましたのは外の儀では御座いませんが實は私共が日頃出入する屋敷に金尾持助様と云ふ方が御座います其お屋敷の今夜月見の酒宴と催ふすゆゑ是非參れとの御案内と頂戴致しました處私共は御覽の通りの無骨者で御座いますのら禮儀作法など申すものは夢にも影にも見た事が御座いませんおら實は有難迷惑に存じまして寧ろその事お断りと申して一同に參らない方が恥と搔なくつて宜らうのとも存じましたが折角御案内と頂戴しましたものとお断り申しても何とやら其處に一ツ角が立せして又日頃御贖負に預つて居りお飯の種に何斯と云ふやうな事がありましたは猶以て困ります事ゆる皆一同に鼻と揃へて相談致しました處幸ひ高井鼻藏

先生は何事も知ッて入ッしやるお方様も、彼の先生にお願ひ申して一寸禮儀作法と
 教て頂いたたら宜らうと斯相談が附ましたので皆々揃ッて伺ひました譯で御座います
 が何卒宜敷お願ひ申しますと云へば高井先生は低い獅子ッ鼻と無理にビヨ附せて高
 井「ハ、ア成ほど夫は〜嚙のし御心配な事で御座らう併し禮儀と申すものは爾ど
 うも餅に砂糖とつけて食やうにチョッラ一寸の事には參らぬもので諸君も御承知
 の知らんが禮儀三百威儀三千と申せば中々今日學んで今日の用に立ると云ふ事は縱
 ひ聖人の孔夫子でも出来ない事じや夫もゑ孔夫子さへも老耽に禮儀と學び給ひしと
 云ふ事が御座る故に此禮儀と云ふものは常に心掛て習ふより外に仕方のない者ぢや
 諸君達も失敬ながら油断して禮の一事も學ばねば人の人たるべき甲斐が無いぢや古
 書にも人の人たる以所の者は禮儀なりと云ふて禮儀と知らない者は賤賤男女の分ち
 なく皆禽獸ぢや鴉や犬も同じ事ぢやと云ふてあるぢやチヤのら諸君達も此以後は氣
 と附て禮儀と覺へるやうに心掛るが宜しい就ては今日此處で數の多い禮儀と指南し

て呉へと云はれても右に申す通で中々一朝一夕にオィソレと云ふて指南する事は逆
 も出来ませんぢやチ然れども貴人より折角召れるに禮式と恐れて行ないと云ふのも
 卑怯なり且は失敬ぢやのらハテ何との工夫がありさうなものぢやがトボク考へ……
 ム、工夫があるぢや夫では斯致さう何との名とつけて拙者も諸君と同伴して拙者が
 何事も先へ廻ッて禮儀と施すのら諸君は能く氣とつけて拙者の爲る通りに眞似とす
 れば何の斯の其席だけの事は纏りが附ぢやらうチ其處で諸君に一寸云ふて置事があ
 るが總て禮儀と云ふものは誠に敬うと云ふ心と以て本とし之に顯るゝの花と思ふて
 居らねばならん先づ我國の禮式には北條流、伊勢流、小笠原流など、流儀は多けれ
 ども畢竟は所作の下卑ぬやう美麗と以て主とするのぢや俗に駄と云ふ字があるが此
 賤と云ふ字は人と禮儀に仕付ると云ふ意味で身の取廻し麗しく進退周旋規に中り
 折旋するに矩に中り言葉遣ひや身の舉動も總て賤くないやうにせねば成らんぢや
 未だ其外にも話しとする事が澤山あるが餘の事は席上に臨んで指南する事に致さう

と云へば皆一同に喜んで夫では何分宜しきやうにお願ひ申しますと各々勇んで支度と爲し時刻と計って金尾の屋敷へ行き案内と乞ふて熊野井苦助は兩手と突き苦助「ハイ今日の今夜佐藤甘藏と始めお出入の者共一同に御案内と頂戴仕つりましたもゑ一同に揃って参上仕つりましたして御座います夫に就ましては手前共のツイ近所にお住居に成て居られます高井鼻藏と申します先生がお屋敷のお庭と拜見致し度と申されますもゑ私共と一所に相伺ひまして御座います元來この高井鼻藏と被仰る先生は詩文章歌俳諧は申すに及ばず葉唄都々一トツチリトン二上り三下り常盤津清元アロレン祭文阿房多羅經何でも艱でも出来ない事は無いと云ふ先生で御座いますのら是非私共と一所に御酒と頂戴の儀とお願ひ申したう存じませ若し此願ひとお聞入下さらぬに於ては私共の顔潰れ先生と歸して私共は有りが跡で御酒と頂戴致しますなどは決して本意では御座いません體の一事と學ばねば人の人たる甲斐のない譯でして古書にも人の人たる以所の者は禮儀なりと云って禮儀と知らない者は貴賤

男女の分ちなく皆禽獸で鴉や犬も同じ事だと云って御座います夫だのらお前さん達も此以後は氣と附て禮儀と覺へるやうに心掛るが宜しい總て禮儀と云ふものは誠に敬ふと云ふ心と以て本とし之に顯るゝの花と思ふて居らねばならん先づ我國の禮儀に北條流、伊勢流、小笠原流、など、流儀は多けれども畢竟は所作の下卑ないやうに美麗と以て主と仕ます俗に咲と云ふ字がおりますが此咲と云ふ字は人と禮儀に仕付ると云ふ意味で身の取廻し麗しく進退周旋規に中り折旋するは矩に中り言葉遣ひや身の舉動も總て賤くないやうにするのが是が禮式の大略で御座います、折角御案内と頂戴致ししても禮儀と恐れて参りませんのも甚だ卑怯なり且は失敬で御座います夫に就て此高井先生と頼んで一所に來て貰ひ跡の處は席上で指南と受け見真似とすると云ふやうな譯では御座いませんけれども此先生とムザ／＼歸しましては私共の顔にのりります事もある何卒高井先生も私共と同様に相伴とお願ひ申したう存じますと今聽た逐一と能く覺へて居て口をら出任せに聞はず語りすれば取

次の人は退屈して大欠伸としながら奥に往き其大略と主人へ申し述べれば主人金尾持助氏は之と聞て 主人「高井鼻藏と云ふ人は餘は博識の人と聞及んで居たが夫は宜い處へお出下された先づ座敷へお通し申して失禮のなき様に爰應よとの命令に取次の人は畏まりて再び立關に出で其次第と逐一述べ客の間へ通し懇ろに爰應せば高井鼻藏は先に立て一々式禮と爲すも佐藤甘藏熊野井苦助夫茂物太何尾勇藏小松田琴太等皆一同に眼と配り鶴の眼鷹の眼見真似して高井鼻藏がする通り馬鹿正直と守つて一心不亂に覗ひ居る折ら主人金尾持助氏は美々敷衣服と着飾りて容儀正しく對面し高井鼻藏と始め皆一同に挨拶も終りければ彼の甘藏等は只管に高井鼻藏のする所作に注目し之と見落すときは一生涯の恥と思ひ瞬きもせずに見詰て居て高井鼻藏が咳拂ひとすれば一同に出もせぬ咳とコン／＼とせき高井鼻藏が鼻汁とらめば一同々出もせぬ鼻汁とシユン／＼とのむなご一々真似とするも流石の高井も呆れ返つて居たりしが斯る中に膳部も出で酒杯は盛んに座席と巡り料理は種々様々ある中



入まぢあゝの
尻／＼と
刺さる
目／＼と

高井

に魚肉の摘入と小芋の丸きと添物ひにしたる汁ありしと高井は椀の蓋と取て汁一口吸ひ箸にて小芋と挟まんと仕たる拍子にツイ誤って取落し座席にコロコロと轉げると彼の甘藏等は早くも見て取りオット心得たり小芋とコロコロと轉はすが禮儀なるものと皆一同に小芋と席へ轉ばせば高井鼻藏は仰天しコは何事ぞ面皮なし早く挟みて取んとて急ぐ拍子に又轉ぶと一同は又見て取て挟みのけては轉ばすのが禮儀なるのと一同に彼の下手な玉突と見るやうに挟みては故意とコロコロと轉ばせば座席一面幸たらけ餘りの可笑さに主人と始め御新造給仕に至るまで臍と抱へて失笑すに高井鼻藏も可笑さの餘り顔と飯椀の中に押當て居りし拍子に飯粒が二ツ三ツ顔に付は又た是も禮儀なるのと思ひ皆一同に飯椀へ顔と押つけて顔と離せば顔中は皆一面の飯だらけに高井鼻藏は益々呆れ次に並びし佐藤甘藏と何とするぞと臂と以て突は甘藏は是も禮儀と心得て次に扣へし熊野井苦助と何とするぞと突く苦藏はオット心得たと臂と以て夫茂物太と突は惣太は承知と次の何尾勇藏と突く勇藏は宜しい心得たと次

の小松田琴太と突は琴太は此席の末座なりしゆゑ突人の無さに當惑し殊に一同の中でも少し振作の質なれば腕と捲り臂と張り高井鼻藏に向つて大音とあげ 琴太、モン先生この臂は何致しませう

○老人の同行

西の都に阿多魔元太と云へる八十になる老人あり如何なる宿世の因縁やら妻子孫にも死後れ愁傷盡ぬ徒然に土地の住居も厭忌になり鳥が啼てふ花の吾妻に致らんと旅の仕度と調べて西の都と出立し、何日の御法に大津なる、心は矢走と飛たてど、急がば廻れカラくと、瀬田の唐橋うち渡り、四方の景色と眺むれば、月に名高き石山寺、宇治の川には螢谷、幽に見ゆるは獅子飛村、此方の向ふと見渡せば、比良の峯には積る雪、堅田の落雁浮御堂、大島小島に竹生島、遙のに見ゆるは長命寺、オツと高いが比叡山、遠くに見ゆるは三上山、大津で名高き三井寺と、眺めて足と早めつゝ、草津へ來り焼が餅にて休息し、石部水口坂の下、奇の心と關留て、船と

延る龜山や、手柄庄野の石薬師、四日市より桑名經て、伊勢と名残の舟渡し、七里
 の海と恙なく、尾張の宮に着にけり、行末何と鳴海潟、地鯉鮒岡崎紫に、由縁と
 含む藤川や、心赤坂御油吉田、往來の人と招るる、流れと汲て二川の、雪にうつ
 らふ白須賀も、風が荒井の遠江、御代と壽ぐ舞坂も、賑はふ鶴の濱松に、走る天龍
 打越て、歩みと運ぶ袋井や、とけぬ氷も掛川や、朝日輝く日坂も、黄金花咲く金谷
 とて、流れも早き大井川、島田の驛とたどりつゝ、紫匂ふ藤枝も、軒端も白き宇
 津の谷の、宇津の山邊も現にて、柳に馴染む鞠子とは、詠めぬ飽ぬ駿河路や、府中
 へ行ば一參に、江尻とさして沖津風、由井蒲原や清見潟、松風よりも三保が崎、霧
 立登る藻鹽屋の、南は蒼海漫々と、帆風は天に飄へり、北は中山峙ちて、たなびき
 渡る雲の上、眞白に見ゆる富士が峯は、三國一の名山と、見渡す景色吉原や、氣も
 勇しく原の雪、沼津とさして神垣や、三崎の宮と伏し拜み、箱根の山と打越て、蛙
 飛るふ小田原の、早く住居に大磯と、思ふ念力虎が石、元の憐れは平塚や、元より

足と藤澤に、戸塚は急ぐ程が谷と、心も空に神奈川や、川崎越て鈴ヶ森、鹿養れば
 品川の、花の都に着にけり、杖と力に元助は、高輪さして行とまに、後の方より聲
 とのけ「オイ〜若い衆お待成され」と呼ぶ者ありければ元助は不審に思ひハテ自
 己は最早八十歳の高齡なるに自己と若い衆と呼ぶ人は誰なるかと振り返りて見れば
 嬰鑠たる一人の老翁勇氣凜々たるに元助は禮と爲し、元助「扱て拙老は當年八十歳
 の老人なるが君はお幾歳で御坐いますかと問へば老翁は莞爾笑ひて、老翁「拙老は三
 浦大介と申す者で今年百六歳ぢやと云へば元助は驚いて、元助「成程夫では拙老と若
 い衆と云はれしは御尤もぢや然らば是より御同道致さんと二人打連て行く跡より又
 「オイ〜若い衆先づお待成され」と呼ぶ者あり二人は怪みて之と見れば三浦に倍せ
 し嬰鑠の老翁も亦二人は懇ろに挨拶して姓名と述べ、三浦「扱て我々は八十歳と百六
 歳の老人で御坐る然るに我々と呼で若い衆と云はる、御身は何人で御坐るぞと問は
 其老人は答へて、老人「拙者は武内宿禰と申す者にて年齢は三百六十歳で御坐ると云

ふと聞て二人は驚き 三浦「なるほど夫では我々と若い衆と仰せらるゝは當然の事と三人連立て行く後より又聲とつけて「オイ／＼若い衆お待成され」と云ふ者あり三人は之と願みるに漢土の人と見受たり三人は敬禮と施し其名と問へば 老翁「拙者は東方朔と申す者にて歳は八千歳なり」と云ふと聞て三人は驚き 武内「成ほど夫では我々と若い衆とね呼成されしは御尤も千万ぢや然らば是より御同道致さんと四人連にて語り行く所へ又も後のら聲とつけ「オイ／＼若い衆お待なされ」と呼ぶ者あるもゑ四人齊しく之と見れば一人の壯士が一本の釣竿と肩にし魚籠と提げ飄々たる有様に四人は不審に思へど先づ禮と施して各々の姓名年齢と述べ扱貴方のお歳はと聞ば 壯士「小生は浦島太郎と申す者にて歳は八千歳で御座る」と云ふと聞て 東方朔「如何さま夫では我々と若い衆と呼ばれしも無理でない然れば御同道致さうと五人伴なひて通り行く折のら又もや後の方より「オイ／＼若い衆先づお待なされ」と扇と開いて呼ける者あるもゑ五人は留まりて其姓名年齢と尋ねれば 某「私は万歳

で御座りやす」と云ふと聞て五人は大に感歎し我より外に老人は無しと思ひ居たるに上には上の老人あり是に由て考ふる時は總ての藝道も此通りなれば決して自分免許の高慢面と爲すべからず、彼の曾子の能と以て不能に問ひ多きと以て寡きに問ひ有れども無きが如く盈れども虚しきが如くと云はれし確言も此等の事と思はるれば實に誇るまじきは藝道なり古人の句にも「伸るほど土に手と突く柳のな」又た「下るほど見上られけり藤の花」など、警戒せし句あり慎むべし／＼と六人伴なひ行く處へ「オイ／＼童子衆まづお待なさい」と呼者あり六人は呆れて立留り何者なるぞと見返るに思ひ掛ない老婆にて頭に白髪と雪と頂き風呂敷包と山程背負ひけると六人は扣へて詞とつけ我々共は八十歳より万歳までの老人なり然るに我等と輕卒に童子／＼と呼ばれたる抑も御身は何人で御座ると云へば老婆は笑ひながら 老婆「ハイ妾は七億(質置)婆アで御座います

○手洗の間違

某處の商人に福徳富右衛門と云ふ者ありしが其息子の富太郎は業平丹次郎も徒既で
 逃出す位の世に珍しき美男子でお負に懐中にはドシニコと〇と持て居れば所謂る鬼に
 鉄棒龍虎に羽翼怡然飛鳥も落る勢ひなり、其家に十七八のお松と云へる下女あり、
 此お松は至って、正直正名の女なれど、可愛想に未だ種痘とせぬ中に天然痘神に可
 愛がられ、殊に難症にてヤットの事で命だけ助のつた笑標は顔に残りて、世に云ふ
 蚊死なす痘痕と印籠痘痕と合併した痕あり、扱蚊死なす短痕とは如何ある痘痕の
 と云へば、夏の夜にブーン〜と鳴て蚊が顔へ止るのと並の顔ならビシヤンと一ツ
 叩けは夫で蚊は往生すれど痘痕の穴が深いもあるビシヤンと叩いても蚊が痘痕の穴へ
 逃込んで一疋も死な無いもある又候ブーン〜と鳴て出て来る之と蚊死なす痘痕と云
 ひ、又印籠痘痕と云ふのは指の頭と痘痕の凹い處に押込で扱はヌボンと音がする其
 音が印籠の蓋と開る音に似て居るもある之と印籠痘痕と云ふとのや、彼のお松は斯
 様な痘痕のある上に色は眞黒にて黒狸に油墨と塗附たやうな不別品、動物園の審査

官にお目に掛たら無論一等賞牌は頂戴が出来さうな人一化九の女なれど、鬼も十八
 山茶も前花蓼食虫も好不好とやらで不思議な事には今業平の富太郎が此のお松と何
 時しの割なき中となり、水漏さじと契りと込め、天に在ては比翼の鳥地に在ては連
 理の枝、住ば諸とも山の奥、縦ひ野の末谷の底、何處までも伴はん添還んとの約
 束のありとは露も白髪親父、石原村に石よりも堅き石部の石右衛門勝手口から小
 腰と屈め親父「ハイ是はハアどうも御不沙汰とウ致しまして誠に早どうも申譯ノ
 ウありましねへで御座りませんだア夫お就ましては彼のお松阿魔アもモウ是れ十八
 にもなりますだアから何時までも御厄介にはハア成て居りましては親の役目が済ま
 しねへから何處でも相應な破鍋に綴蓋の處がありましたなら一日も早くツン出して
 遣度と思つて居ましたアだが今度村の作兵衛とんが世話アして呉ッしやるチウ話し
 に成りましたに就て彼のお松阿魔アのお暇と戴きに参りやしたので御座りますか何
 ら旦那様にもお話しとウ願ひますだアと云へば此家の細君は笑顔と作り内儀「オ

ヤさうのね夫はマアお目出度……爾云ふ事なら早速良人へも話と致しませうト其旨
と主人へ通じければ主人も異儀なく承知せしゆゑ親父の喜びは一方ならず善は急げ
と娘と連て暇乞せしが是に引替へ娘のお松は彼の富太郎と深い中、引分られて是非
もなく落る涙の漣津瀬の玉と此世の置き土産、屠所の羊の力なく先へは一足後へは
三足、心と跡に残しツ、見返りく歩む道、其歩取ぬ面倒さ、様子知らねば石右衛
門、無學文盲去りながら正直律儀一筋に親父「ヤアお松ヨー其歩行態ア何の真似だ
ア夫だアのら奉公なんぞすると困るチウだ……手前が在所に居た時にヤア何として
居たアだの能くマア考へて見ろヤイ草も刈たり落葉も掃たりソレ田植だアヤレ麥蒔
だアチウて荒仕事ペエして居たアのら其頃にはヤア足も達者で七里や八里の道は日退
りにしたぢやアねへの夫が些とんべエ大盡へ奉公すると最ヤア大盡風に成りやアが
つて碌玉に道も歩行ねへチウなア何の事だ……自己等アハア腰はツン曲ツても手前
等にヤア負ねへぞ是見るやヤイ此寒い時だアチウても足袋も穿ねへて手前と迎へぬ

来るだア……夫だアのら手前もツツカリして歩行やいと久松の親父氣取で小言と並
べながら娘と連て歸りし跡に彼の富太郎は唯ボンヤリとして鳶に油揚と擡はれし如
く臍振となり、思ひに沈み胸と焦して日を送る中に身体は瘦せ食事は減り彼も此よ
と療養に手と盡せと薬の功能は更に見へず、唯手と束ねて死と待の姿と成りければ
兩親は殊の外に心配して居る折柄に、富太郎が常に兄弟同様にして居る甚六と云ふ
友達が尋ね來りて甚六「何だね君些たア氣分が快ささうだねト聞は富太郎は重々頭
と擡げ富太郎「イヤ甚六さん毎度御深切に御尋ね下さつて有がたう……マガ甚六さ
ん僕の病氣は逆も全癒ないヨ甚六「其様な弱い了簡だのら行あい尤も命は天に在り
牡丹餅は棚に在りと云ツて人間も命數が盡りやア致し方なしに棺桶の御厄介物だけ
れども未だ命數の盡ない者が極樂行とするなア多くは神經のら起るのだのら最少し
神經と活潑にして長命とするやうに了簡と取直し給へ富太郎「イヤ僕の病氣は決して
全癒ないと云ふ理由がある甚六「ハアね夫はまた妙な理由があつたものだが全体

その理由と云ふのは何云ふ理由だの僕に話して聞し給へ富太郎「是やア君たうら話
 してするが僕の病は實は戀病たうら逆も醫者の藥と浴るはど飲でも無益サ甚六」成
 程さう云ふ原因があるなら早く聞は宜のツたに……ナニニ恥入る事はあるもの若
 い時に誰だッてある習ひでス……宜しい爾云ふ事なら僕が何様なにも盡力して必ら
 す其婦人と君の細君にして進せやう縦ひ華族の奥方イヤ奥方と嫁に貰う譯にやう行
 ないが華族でも先方が娘でさへありやア今は平民と縁組も出来る世の中殊に君の金
 満家に君の男振なら何爵の娘だらうが痴癪の虫たらかが決して否とは云ふまい……
 シテ君が添度と思ふのは深窓の中に養育られた令嬢のね富「ナニニさうぢや無い甚
 六さうで無ければ猶更容易い事だが然すれば彼の万屋の今揚貴と名も高い花の顔
 雪の肌起ば芍藥坐れば牡丹歩む姿は百合の花、達摩も吃驚久米仙も膽と潰して雲
 の上ららスツテン轉々と轉げ落さうな別嬪のお花さんのね富「ナニニ甚六」ハッね
 然らば今小町と評判の年は二八の細眉で髪は烏の濡羽色、眼元涼しく鼻筋は天憲へ

通り尻へ抜け恰然梅ヶ香と櫻の花に添へて柳の枝に咲せたやうな彼の鶏卵屋のお若
 さんのね 富「さうでも無い 甚六」さうで無ければ誰だらう、さうく彼の横町の
 箱入娘脊は高のらす低のらす色は白のらす黒のらす眼元口元に云ひ分なく頭うら足
 の爪先まで何處に何一ツ非の打處のない沈魚落雁閉月羞花一度笑へば百媚生じ二度
 笑へば家藏と傾け瘡も落ちシヤツクリも止むと云ふ彼の三味線屋のお糸さんのね富
 「ナニニさうで無い 甚六」是は困つたら然らば年は少し違へど縁は異なるもの味なものだ
 ろら云ッて見やうが彼の町内で後家と立ぬくお節さんのね彼のお節さんは操の鏡く
 もりなき女子の徳ある美しさ眉は三日月顔は花、七難隠す容色に歌舞吹彈詩歌茶の
 湯、基將某發句俳諧も何一ツとして出来ないものは無いと云ふ小八ヶ間しい肩書附
 の後家さんのね 富「ナニニさうぢや無い 甚六」シテ見るとモウ僕には見當が附ない
 が誰だね早く云ッて見給へ 富「夫はさまでに君が心配として下さるなら思ひ切てお
 話してするが實は先日まで僕の家にお三とんとして居たお松サと聞て流石の甚六も

吃驚仰天サテ、世の中は妙なものだ人心の同じらざるは猶その面の如しとは云へ彼の色の真黒な痘痕、面の化物見たやうな女に惚て戀病と起すとは随分世には茶人もあれは有るものだ餘りの事に呆れて物も云へないと腹の中では思へとも何に致せ先は大病人殊に虚言のやうにも非ざれば愚弄して笑ふ譯にも行ず據ころなく眞面目になつて 甚六「成はを再ですのへー彼のお松さんですの夫ならさうと早くさう云へは宜に男の癖に戀煩ひるぞとは活智のない……宜しい僕がチャーンと承知した乾度引請て媒妁と仕やう……ナニニ造作もない事だと云へば富太郎は大層喜んで富一夫ぢやア何分ともに宜しきやうにお頼み申します 甚六「儘に承知しましたと云ふので早速に其由と富右衛門夫婦に語りければ兩親は呆れ返り餘りに不釣合、提燈に釣鐘とは思へど命あつての物種若し富太郎が病死せば福徳の家も断絶せん左ある時は一大事と思案と定め是非なく兩親も承知して何事も宜しきやうに頼むとの事ゆゑ甚六はグツと呑込で石原村なる石右衛門の家に行き事の始末と物語れば石右衛門夫

婦は夢のとほり打喜び見る姿もない我娘と福徳様の嫁にして下さるとは身に餘りたる冥加なり、外へ約束は仕たれども未だ結婚の取替せもせされは破談にするは遺作もなし、殊に彼の娘も宿に下りし其後は氣分も悪く食は細り遂に病の床に臥し日に瘦ゆく哀れさは眼も當られぬ次第にて近所の醫者に治療と頼めを逆も不治の病だと云はるゝも涙流さぬ日とは無し唯あり難き一言と此世の名譽、耳に入て喜ばせん先づ御緩りと御休息下さるべしと、酒肴と饗應して母は娘の側へ行き 母「コレヤアお松よ今日福徳富右衛門様のらノウ手前が正直に奉公とした大層お氣に入だアと見へて勿体ねへ事だ手前と若旦那様の嫁に呉るチウて甚六様アチウ人が来としつたッア……だアけんぞノウ手前の病は逆でも治癒めへのら此あり難へん詞と賦土の土産にしてへお目出度死去れやアと云ふ母の言葉と聞くや否娘のお松はハツツと跳起き お松「何だッて母親さん夫やア本當で御坐いますのへト俄然に大病人が跳きたるに母親は驚き 母親「お松やア手前ヤア氣でも狂つたのやア自己やア吃驚した

「ア……夫やアハア本當だアが本當なら手前やヤとウするだアやね橋」
 御坐いますの夫やア有がたう御坐います私やア夫と聞ばモウ病氣は全快ました……
 お粥は止ませうお茶漬と頂戴ませうと云ふやうな騒ぎで夫のらはサア湯に運入ませ
 う髪も結ませう使ひがあるなら人と頼んでは隙が入ら私か一人で行て來ませうな
 ど、夜も晝も寝ずに壯健しく立働ひて支度とするので兩親は夢に夢見し心地、
 如何にも不思議な病氣だが扱は戀病でありし、斯く不釣合の縁談と申し込むらに
 は是は何でも双方が兩親の眼と暗まして縁と組しお相違なしと胸算用はハハと合ひ
 たれど何にても氣病と云ふは妙なものだと感心せり（編者曰く或醫者殿の話しには
 精神病の療治は意識と轉じ換るのが藥治に千層万倍殊に戀慕の病には其思ひと意
 させるのが無二の療法なりとの事、彼の一人一化九の醜婦が業平然たる美男子の御意
 に入とは實に不思議に似たれども夢食虫も好不好、縁は異なるもの味なもの、捨る神
 ありや助ける神あり、女は氏なくして玉の輿に乗り、人間万事塞翁の馬と見做は事

足ん、又女の一念は岩とも透すの説あり、即ち佐用姫は石と成り清姫は大蛇に化た
 りなと云へど或學者は之と虚言として辨じて曰く夫れ正法に不思議なし、天象地
 球皆古來より確定の模範あり、日月星辰空に懸り爛然として地に墜す、禽獸草木蝶
 然として發育す、其理廣大無邊にて限りなく見ゆれども、精微の境に確定の規則存
 して秋毫微塵も相違なるべし、有機体の全圓なる無機体の稜角なる、角ある者は
 牙なく牙ある者は角なく、胎生の上脛と動らし、卵生の下脛と動らす、其理天地と
 共に確然と動らぬ譯の存すると以て蛇になり石になる奇怪の事は無ければ石に立
 矢の例しの如く、一念力の尖きと譬へし者と説り、然れども戀はと妙なものばなし
 死せんとすまでに慕りたる病氣も願ひ叶ふては即時に快然とする妙機實に不思議と云
 ふも愚なり、扱て彼の富太郎お松の縁談も甚六の周旋にて慈なく事の體まりければ
 善は急げと吉日撰び、開化の世にも舊習の古實崩さぬ福徳屋、三々九度の至の格も
 四海波靜の、靜のな波と疑がへる青き灘に聳たる、島の臺盤堆のく、蓬萊方丈瀟湘

も寄せ合せたる寶島、島臺にある尉と婆、符熊手と持給ふ、婆は常の人でなし、是れ其實は伊弉諾の尊、佐弉册の尊と表し、持給ふ符と熊手は、落葉掃除の事でなし人の心の塵埃、掃き清めよとの御心と、表するものと聞傳ふ、嫁の装束緋無垢着し、上に眞白の裾は、赤子の胞衣と纏ふ摸擬、又一説に白色は夫婦の家風に染らんと、思ふ誓ひの表とのや、既に婚儀の式終り、夫婦の首途子孫の根、福德氏の名にし負ふ、福德門の賑はひに、枝も榮へる葉も茂り、比翼の契り睦まじく吉日選び、婿入の照會ありて、釣臺に、音信物と山程も、積で持出す何十荷、此方は田舎相應に、屋根萱煤取り黒鼻と、垂て家とば清めつゝ、壁の上塗疊替へ、俣石吉石右衛門の弟岩之助、又は作男の鈍助等、狂氣の如く馳廻り、力の限り精出して、心の丈と盡しつゝ、響應なして式終り、酒宴も済て床に入り、其夜も明て翌朝の事、富太郎は起出て自家で習ひの他所とやら、襟先に出て手と叩き富太郎「手洗水と頼みます手洗水と廻して下さむといへば根が無學文盲の石右衛門なれば 石右「コレハア岩素

婿殿が襟先で手と打叩いてチャウツと廻せへと云はッしやるだアが手前やアちやうづチウ事だア何の事だの知ッちよるのい 岩「何一ちやうづだアつて……ちやうづチウな何の事だの知りましねへだが何の事だの婿殿に聞て見たら宜らんメエや 石右「何と馬鹿な事と云ふだア初めて來さッしつた婿殿に其様な事が聞るものい 岩「夫だらせうしエエ 石右「せうしエエチウて仕方がねへらなア手前やアお寺様いッウ行て何の事だの聞て來て呉やといへば岩之助はオット承知と尻のらげ、一目散に寺へ行き戸とばがツリと押し開らさ 岩「ハイ御免くださいさいましト音なへば和尙は直ぐに胸勘定キツト新亡の案内の先にお布施に有り附いたと嬉しき顔と押し包み、オツにエヘンと咳拂らひして出で來たり 和尙「イヤ誰のと思やア岩素のヤア此方へオツト上らッしやいと聞て岩之助は兩手と 下岩「ハイ和尙様今日の……昨夜のハア兄アの石右衛門處へ婿殿が参りやしてお目出度存じますだア 和尙「コレ岩素やお前さん何時もッ、ツカしいなア夫の此方で云ふ事ぢやアないの 岩「本にヨ是やア濟ま

しねへアハハハハハ、和尙「夫やア宜が早朝より周章て来さッしやッたるア定めし新
 佛が出来さッしやッたのだらうが全体誰が死なさッしやッたい葬式は何日と極りま
 したへ何でも備へ物と澤山してお念佛が大事だよお念佛と唱へるのが何よりの供養
 ぢや南無陀彌陀佛々々々々々々 岩「何よ其様な延喜の悪い事ぢやアありましねへ些
 んべエお聞申し度事があつてハア参りやしたト聞て和尙は面目無氣に 和尙「ハナね
 夫は氣の毒な事と云ふたなア……シテ其間度と云ふのは何の事だね 岩「外の事でも
 ありましねへだが今朝頼殿が椽先イ出てチャウツと廻せチャウツと廻せハナッたア
 が全体チャウツぢらなア何の事だが教て呉ッしやれエと云へば和尙の暫くの周章
 へて 和尙「成程ちやうづ……ちやうづたア何の事だのなア自己にも些ッくら了解な
 いがマア待なさい自己が字引で讀で進せやう古ぼけたボロくのいろは字引と取
 出して彼方此方と色々に調へ 和尙「ハ、ア了解た〜ちやうづと云ふのの唐の字で
 長い頭と書のだらう長頭と廻せと云へば長い頭と廻して見せると云ふ事だト聞て岩

之助は大喜び早速歸ッて其趣きと石右衛門に云へば 石右「さうのい夫やア何より長
 い事だ夫だら彼の凡突坂の阿房兵衛と呼で来いヤ彼奴ア頭の長ヘナウたら小三尺も
 あつて鉢巻とするチウてもハア二ツも三ツも締無さやア利ねへ位だアから彼奴の頭
 と廻したら宜のんべエ 岩「本にヨ彼奴ならハア宜のんべエ……些くら行て呼で来
 エと岩之助の大急ぎで阿房兵衛の家へ行き 岩「コレハア阿房兵衛をんや兄アがお前
 に急用があるチウて待てるのら直に來て呉ッしやれト云ひ捨て歸りければ阿房兵衛
 は小首と傾げ是やアハア大變な事が持上ッたぞ自己は平生に人の物が欲しい病がある
 だアのら石右衛門をんの家イ仕事に行ても鎌だの鍬だの色々な物と持て來るだアが
 其化の皮が顯れて役人が捕縛に來たんマンベエ恐怖ねへ事だモウ悪い事ア出來ねへ
 と悄悄として石右衛門の家へ來て見れば案に違はず見馴ぬ人が大勢ガヤ〜と騒い
 で居るゆゑ夫ころ役人に相違なし縛られぬ中に白狀して罪と軽くして貰うが上策と
 勝手口へ廻りて福祿然たる長い頭と下 阿房「ハイ御免下さいまし阿房兵衛りて御座



ります、どうもヤア天道様は恐怖ねへもので御座ります自己は、何の因果だア
 の人様の物が欲くって欲くって溜ねへらツイヒヤア悪い事だア知りながら且
 那樣アの鎌だアの鋏だアの手當り放界に持て行て誠にはア濟ましねへト詫れば石右
 衛門は待兼たる處ゆゑ 石右「ハア阿房兵衛のい今手前が云ふ處ヲ聞やア自己の家
 來る度に鎌だアの鋏だアのと持て行たアチウが自己が今呼に遣たなア其様な事ぢや
 無へ昨夜自己の家イ婿殿の初入があつたんダアが其婿殿がハア長頭と廻して見せろ
 チウだア……長頭チウなア手前なんざア知るめへが長へ頭と廻して見せるナウ事だ
 が外に長へ頭の人ア無へら手前の頭と廻して貰ひ度だアと云へば阿房兵衛は案外
 の事に間拍子ぬけ扱の盜賊の吟味では無ありしものと問はず語りに我ら饒舌りし
 の残念と後悔すれど最早及ばず然れば頭と廻すのり最も易事なれど唯困るのは平
 生の頭痛持左なくとも痛む癖なると廻さばなとの溜るべき先づ一應は詫て見んと
 房「夫やアハア何より易い事で御座りますけんぞ自己ハ平生に頭痛持で困ります

だアのらは是ハ免しと願へますだアと聞て石右衛門は聲と荒らげ 石右「手前や
 ア何と云ふだア日頃の恩と忘れやアがつて些んハ頭痛がせるチウて頭廻せねへ
 チウ事があるもんかい……頭が廻せなきやア廻して貰ひねへでも宜だア其代りにや
 ア自己の家でハア泥坊ノウしたア事ヲ役人衆へさう云つてソコ縛らせるのら爾も
 ヲ居ローと怒れば阿房兵衛は當惑して 阿房「マア其様に怒らッしやるなヨ夫たら
 骨折て頭ノウ廻すハエのらソコ縛るなア勘辨して呉ッしやれト云ふので石右衛門は
 怒りと鎖め夫ぢやア早く長頭と廻して呉と羽織袴に扇子まで添て渡せば阿房兵衛は
 之と請取て身支度と爲し長い頭へ三ッ四ッ鉢巻し庭先へ出て平伏すれば富太郎は之
 と見て吃驚し一圓合點が行ねども猶も勵しく手と叩きて手洗くと呼び叫べば阿房
 兵衛は婿殿の怒る氣色に恐縮し早く機嫌と直さんと思ひ 阿房「ハイ、未熟だアけ
 んぞ持合せの長頭と廻しますで御座りますお目に留りやアお慰みト扇と開きて料
 拂へ輪なりに頭と振り廻せば富太郎は益々シレ込み 富「是の怪のらん化物同様の

廢物と出して我々と愚弄するとの失敬千万其様な馬鹿な事と仕ないで早く手洗と廻して貰ひ度と云へば阿房兵衛は早く〜と急立るの我身の事と心得 阿房「ハイ〜早く廻します〜」と云へば其様に怒らぬへでドウぞ御覽じやッ下せへました又も〜と云へば富太郎は彌〜怒り殿しく手と叩き 富「何とツツ〜して居るのだ早く手洗と廻さ無いの早く〜と急立れば聲に恐る、阿房兵衛は一生懸命根限り命限りに振廻し眼は眩み氣は遠く兩手と以て頭と抱へ 阿房「オー痛へ〜何程〜」と云へばッしやッても是より早く 廻されましねへオー痛へ〜と溢しながら頭と振廻すので富太郎も餘りの事に呆れ返り扱〜天下は廣いもの此文明の世の中にも此様な馬鹿があるもの馬鹿〜しいと其儘式と濟せて歸宅せしが跡より又も吉日と撰びて眞の初客となり石右衛門と始めとして石吉岩之助作男の純助諸共に諸進物と取揃へ福徳富右衛門の宅へ來りて見れば大廣高樓鐵城として七寶と以て粧飾し疊は青海の波めける備後表に蓬風の色、壁は 貝輝きて暗夜の星

に異ならず床の廻りの南天の柱、紫檀黒檀鐵刀木、沉香などの細工と整し、唐獅子の香爐に焚ける伽羅の烟の馥都と立登り、庭は泉水築山の景色奇草珍木の有様は際美しく池には築島遊魚あり席に山海の珍味と並べたるに、田舎者の石右衛門等は賤と潰し、是の人間に非ず天上界の仙境の又の夢にのめらざるの、夢なら覺るな〜と頬と捻つて試せども、痛けりや矢張り夢でなし、千秋万歳目出度と既に其夜の式終り翌朝に成り、石右衛門は椽先へ出て思ふやう此間橋殿が來りしとき長頭と廻せと所望ありしゆる阿房兵衛の頭と廻さして馳走せしが我々も長頭と所望せねば田舎へ歸つて話しが出來ぬと彼の富太郎の眞似として手とパチ〜と拍ち 石右「長頭と一ツお願へ申しますアと未だ云ひ切ぬ内に小者はハイと答へて銀の盃に湯とナミ〜と汲み南京鉢に水と添へ小皿に雪のやうなる白き鹽とは山に盛り、龍膽露香入りの齒磨きに瀧木揚枝と四五本添て美しき巻繪の盆に載て目八分に持來り 小者「ハイお手洗と廻しまして御座りますト容儀正しく一禮と爲して奥に入れば石右衛門

は弟息子純助までと呼寄せて潜るに云へるやう 石右「ヤア是はア見ろやい自己等が
 ハア在所で長頭チウなア長へ頭と廻したアけが此邊の長頭チウなア此様な物と云ふ
 ののなアと互ひに手と拱ひて考へしが三人寄れば文珠の智慧龜の甲より歳の功とや
 らで石右衛門のハアと手と拍ち 石右「ム、了解たア〜是アハア茶の湯チウもんだ
 んベエ自己が何時だッけ戸長様に聞た歌に「物の名も所によりて變りけり浪花の置
 は伊勢の濱菰」チウ事と聞たが所變れば品替る道理だアのら自己等がハア在所の長
 頭と此邊の茶の湯と同じ事だんベエ……夫にしてもハア是と何するんだアの了解れ
 へだ 岩「自己にやアハア分つたアだ 石右「何様にするだア 岩「何様にするチウて斯
 するのだんベエ此袋と湯の中へ打込で熱くねへやうに水と交て夫のらハア壁と打込
 で此小へ木の棒で掻廻して飲んだんベエ 石右「さうだんベエ夫も違へねへト正直の
 石右衛門は岩之助の云ふ通りにしてサア是のら飲べエと石右衛門は壁と取わけ一口
 グツと飲ッ、顔と盛めオ、辛へ〜と言ひながら岩之助に渡せば岩之助も一口グツ

と飲みてア、辛へ〜と石吉へ廻せば石吉もグツと飲みて顔に皺と寄せ夫より純助
 に渡せば純助は負ない氣になつて大口と開き四五合わりし湯とグツと思つても腹に
 飲み乾してア、辛へ〜と大苦しみ既に輪なりに廻し合ひヤットの事にて飲み盡し
 満腹したる姿と見て給仕の者は失笑し世に馬鹿者もある者のな手洗の湯水壁磨き
 までと飲たるは馬鹿氣たるにも程ありと思ふ笑ひと押隠し兩手と突て丁事に給仕
 「御膳が出来ましたサア召食ツて下さいませト黒塗の膳に種々様々の料理と載せて
 四人の前へ並ぶれば四人の者の顔と見合せ満腹の鹽水も糸に俯むけす立往生の心地
 して詞と揃へ一同に「何がハアお前様ア先刻に長頭と澤山ハア載りましたアのら連て
 もお飯は食ましねへモウ此儘で歸りませとだア履物と出して呉ッしやれへト留飲持が
 濁酒と飲過たやうにメツア〜と云ひながら立歸りしが村に歸りて純助は友達に向
 ひ 鈍「ヤア彦作ッ自己やア自慢するぢやアねへが手前なんざア東京の長頭チウもの
 ナ知らなのんベエ彼の阿房兵衛が袴ノウ足イ突込で廻したやうな長頭ぢやアねへぞ

其香の宜チウたらアーン／＼と鼻の穴と突こくつてヨ飢饉年でもハナ腹が脹れるチ
ウ奇妙な長頭だアが手前達やア知るめへと誇りければ之と聞く友達は皆羨慕も
以東京の長頭チウなア何様な事だか聞して呉へと云へと鈍助は中々承知せず 鈍「聞
して呉へチウたららッて自己やア命と的にして苦しんだのァら其様に安らア救ね
へだ手前達だァのらチウて濡手で粟と掴むやうに一口に覺へやうチウるア無理だん
へエと云へば 友達「ヤア鈍衆其様な隠強な事チ云ふものぢやアねへや何でも隠す程
猶見度もんだ夫に手前と自己との中は昨日や今日の事ぢやあんめへ夫と隠すチウな
ア餘り水臭へぢやねへ」と云ひければ鈍助はぬらぬ顔で 鈍「何に水臭のァねへ大
層辛のつた

○莖蒲賣

實にや世界の廣さのもの、斯文明の世の中に、未だ開化せぬ人もあり、五月五日の菖
蒲例に、軒の莖蒲を賣んとて、鬻と戴く田舎漢、濁りし聲と張あけて、莖蒲／＼と賣

歩行、此處に奇怪な好事家あり、其家もと捕亡吏にて、持傳へたる鉄刀あり、折の
ら酒の酩酊に、事がなわれと思ふとさ、舊弊爺の莖蒲賣り、イテ一興に感して呉ん
と、俄の仕度の隠役人、鉄刀持て駈出し、故意と漢語の曖昧詞、某「コリヤ待て老
爺、斯く開明の世の中に勝負／＼と云ひ歩行とは時節と知らぬ無法者、野蠻の極と
申すべし、無用の腕力好まずと文明窮理の學に就さ、一秒時間の光陰も、惜みて勉
強致すに如かず、「フランソリン」の語に曰く富と得る道の易くして平なるは市に
行く道の如く唯二言以て盡せり労働と儉約となり、時間と費す勿れ、又金と費す勿
れ、此二ツと巧に用ゆべし、労働と儉約とと棄る時の成事なし此二ツと守れば成
らざる事はなし、少年の男子働きて儉約ならば此外に富と助くる合力は綿密と正直
の二法なり、故に勉強は恰も幸福と生む母親の如しとも云へり、仰々天は万物と
人に與へず働きに與ふるゆゑに今日と云ふ今日の中に働くべし、明日故障ある事ハ
知らず、汝若し人の家來となる時の、其主人より怠惰者と叱らるれば是に赤面爲さ

ゐるが、即今汝ぢの人の家來にあらすして主人なり、自ら怠る處とば咎めて是に赤面と爲さるるべからずとの金言あるに、汝ぢ今文化の御代にも恥す、腕力と恃み勝負と好むとの上と恐れぬ狼籍者ト鉄刀と以て頭のチヨン鬘とボカンと打たる勢ひに元結の切れ鬘は弾け鬘り散て髪亂れ頭に凹と生じ鉄刀はヒーンと反振返りければ再び之と取直し反たる方と上にして又ボカンと打ば鉄刀の元の通り眞直になりしと見て菖蒲賣は立腹し頭と抱へて菖蒲賣「オ、痛い」是の無法な役人理非も討さず理不盡に人の頭と打のみ人の頭で鉄刀の反まで直すとい怪る事、元來鉄刀なる者人の心と實体にするの道具と聞及ぶ、夫に何ぞや其道具の曲りしと我々の頭上で直すのみならず正直と一圖に守る我々と紙筒偶像同様に理非も分たす打るゝとの頭に宿る正直の神に對しても勿体なし殊に當時に似合ざる鉄刀の所置も不審なり、去りながら身の其職に非ざれば鉄刀の穿索は取てせず、夫は扱置さ尊君の御目に賣の賣聲が耳に障ると覺へたり、菖蒲賣でも天命の性と得たるは同じ事、必らず無量

し給ふな天の性と賦與するに貴賤上下の差別なく古歌に「庭の面チリ」草の末までも影と分ツ、宿る月影」とある如く本然の性に差別はあらざれど氣質の性に清濁のありて各々聖賢や凡人の違ひある事と詠する古歌に云ふ「春雨の分て夫とは降ぬとも受る草木の己が様」氣質に清濁あれど本然の徳は聊の差別なし貝原先生が明德と詠せし歌に「皆人の本の心は一寸鏡研らばなごの曇り果へさ」能く考へ給ふべし心が此にあらざれば見れども見へず聞ども聞へぬ事もあり菖蒲賣とて一徳の言語なきには限るまじ僕の呼し賣聲は軒のわやめの菖蒲賣り君は腕力の勝負の事と聞給ふ、音は同じく意味違ふ分つゝ人の心に在り、經に君子の義に喻り小人の利に喻る、詞の語勢後先で其情意とば察すべし譬へば詞同じくも雨と鈴、橋と雲と蜘蛛、灰と蠅、石と醫師、足袋と旅、鎌と釜、土と埴、鼻と花、墨と炭、赤と垢、下と霜、上と飢、傘と梅毒、などは總て語勢で其實と推察すべき事なるに菖蒲賣とば勝負なご語認にして無法にも人と紙筒同様に敲いた上に失敬な人の頭で鉄

刀の反まで直すとい言語同断の振舞ひ、君も少しく學問として首溜と云ふは下が重し勝負と云ふは下が重い位な事は理會あるべしと云へば隣役人は感心して持た鉄刃の地に落るとも知らず某「此奴ア中々の學者だ下には置ない人だと云へば首溜賣は澄アし込で首溜賣」夫だのら屋根へ上ます

○神佛の歸一

「宵寝して晝寝も好む朝寝坊ありく起て居眠りとする」居候朝十時まで寝候「居候煙管で煙草液で呑み」など、野良倉者と詠せし句あるが如く氣随積りて放蕩の山の絶頂のぼり詰め先祖傳來用傳ふ山林田畑家土藏家財道具も賣拂ひ尻のら焦る貧乏に土地に居られず東京へ來てうろくど類の友馬藏鹿平兩人が懐手して出逢がしらに馬藏「オイ鹿公酒は飲めへの 鹿「飲るともく素敵に飲るヨ 馬「ナニサ何處に飲む口はあるめへのと云ふ事ヨ 鹿「何處にッてお前其様な口と探さ無くッても此口で飲らアな 馬「ナニ何處に飲む所はあるめへのと云ふ事ヨ 鹿「夫やアお前酒屋へ行

やア何程でも飲らアな 馬「馬鹿ア云へ酒屋への顔が無へや 鹿「顔が無さやア化物だ馬「手前も悟りの悪い奴だ酒屋へは借に行く顔が無へ 鹿「借無へで錢と持て行やア何程でも賣て呉らア 馬「夫やア當然ヨ然が其錢がねへのら仕方がねへ 鹿「錢がなければやア仕方がねへ 馬「然のら其錢と出さねへで只飲る口はあるめへのと相談するのヨ 鹿「夫やアイッラもあらア一寸早手廻しに遣度けりやア先づ誰の死去た折口へ飛込て行のだ 馬「折口の處へ飛込て行て何するのだ 鹿「どうするンだッてお前折口の處へ飛込て行てよへい御免下さいトカ何との挨拶とするんだ夫のらエ、承まはりますれば御當家の御隠居様も長く御病氣で御座いとした處御養生も叶はず還に御死去の由と承まはりましたして實に驚き入りました嘸御愁傷で入ッしやいませう就ましては迎もれ役には立ますまいが若し相當の御用が御座いますなら御遠慮なく仰せ附られ度御座いますと云ッて見や先方ぢやア眼と泣潰して居るのら何處の何兵衛だの知れぬへでも夫のら御親切に有がたう存じます何れ何の御迷惑な事とお願ひ

中すの知れませんが先づ兎に角奥へ入ッしやッて一口召わがつて居て下さいと来る
 だらうッ其處で無茶苦茶に飲で宜加減な時分にコッソリと逃て歸ッて来るのだ夫
 ら最一ッは何處に火事の有た時に其近所の家へ駈附て行くへイ今晚はドウも騒々
 敷事で御座います何なりとも御用が御座いますならお手傳ひ申しませうと云ッて見
 や先方ぢやア熱ぢやア大變だと思ッてマゴッして居る處だのら何處の人だの分ら
 無くッても夫の御親切に有がたら御座います風の摸様によつて御苦勞と願ひ
 ますのも知れませんが先づ奥へ行て一杯召上ッて居て下さいと来るだらうッ其
 處で只の酒が飲るのだ夫の最一ッは喧嘩の仲裁好きな人が来る前でイヤ勘辨するの
 勘辨しねへのと云ッて喧嘩とするだスルと其人がマア自己に任して呉れ兎に角何
 處で仲直りの酒と一杯飲ふと来るだらう斯來りやア無論其仲裁人の奢りだのら是も
 只酒が飲るのだ 馬「其様な旨い事に行ものい 鹿「行なくッてヨ彼の蔵口屋の隠居
 なんざア喧嘩の仲裁が大好だのら何時でも仲裁とする度びに酒と奢んだ……オイ

馬公噂あすりやア影のさすと向ふの蔵口屋の隠居が來たッ……オイ馬公手前
 は向ふの横町から突然に駈て來い自己やア此方から飛出して行のら其處でトーンと
 突當るんだ夫の勘辨するの仕ねへのと云ッて手前の頭とボカーンと一ッ毆打つけ
 ると手前は自己の胸倉とソツと取る自己は又手前の翠玉とトーンと蹴飛するら手前
 は自己の腕へ齒の當らねへやうに食ひ附く 馬「オイ〜鹿公一寸待つて呉れ手前は
 自己の頭とボカーンと毆打て自己は手前の胸倉とソツと取る手前は自己の翠玉とト
 ーンと蹴飛して自己は手前の腕へ齒の當らねへやうに食ひ附なんざア餘り手前の腕
 手が宜過るぢやアねへの 鹿「マア其様なに理屈と云ふない其様な事と云ッて居る
 中にやア隠居が行て仕舞のら早く遣附ローと二人は急に分れて隠居の來るのと待と
 馬藏は突然に横町より駈來り鹿平は此方より出る拍手にトーンと突當れば鹿平は馬
 藏の胸倉と取て拳骨と振廻し 鹿「ヤイ何としやアがるのだと云へば馬藏も負ない氣
 になつて拳骨と揮り廻し 馬「ナニニ此畜生ト互ひに争ふと見るより蔵口屋の隠居は

ソレ喧嘩だ仲裁として遣んと兩人の傍へ行き 隠居「コレ若い衆マア待なさい何と其様なに手荒な事とするのだ 鹿「マア打棄つて置いて下さい此野郎は餘りづら〜しい奴だのら 馬「何が圖々敷のた手前こそ圖々敷… 隠居「マアサ静に仕なさい静に話ししなけりやア筋道が分らない…マア元の起りは何だの知らないが互ひにさう我と張ては何時まで果しが附ないのら双方に怪我のない中此隠居に任しなさい其代り二人に一杯飲せるのらト云へば二人は圖星に當つて大喜び 馬「しめたナ 隠居何としめた 馬「ナニ彼の野郎が自己の胸ぐらとシメたと云ふ事サ 隠居「さうの自己やアまた無益でも當つたのと思つたト常談と云ひながら隠居が先に立て某料理屋へ行き酒と肴と命じければ兩人は益々鉄面皮なつて牛の鳴聲モウ一杯、狸に野王股一杯、與右衛門の女房でカサチます杯と出放題の駄洒落と言ひながらカフ〜と飲み續けるとさ鹿平は隠居に向ひ 鹿「御隠居さん何でも世の中は酒と女で無くツちやア行やせんね「酒飲ば何處の心の春めきて借金取る 鶯の聲」と實に旨へ歌です

ねへ「酒なくば何の已れが櫻のな」實に其通りですな又酒徳の説と云ふものと此間讀で見たら其中に、世の愛と忘るゝ爲の酒なれば飲で暮すが一升の徳、極樂は紫麻黄金と聞つれを酒なき國の何二升ぞや、雨風の夜半でも何の厭ひなく酒と聞なば急ぎ三升、無理酒も自然と好になる者ぞ是は有りには四升入るまじ、酒飲て佛心になるならば五升の程はうたがひはなし、養生の薬として飲む酒なれば六升に飲な程よきに飲め、身の程と知りて飲なば親心七升までの勘當はなし、淵明や李白のやうに飲ならば末の世までも名とば八升、酒飲で怒らず泣す賑はしふ笑ひ上戸と云ふ九升と云ふ、長命の薬ともなる酒なれば飲で樂しめ世間一斗、なんぞと云ふ事がありましたか成は酒と飲は酒宜樂しみはありませぬへト云へば隠居も打笑ひ 隠居「イヤ酒と御馳走する施主の口より云ふのはチト都合だけれを夫は上戸が我田へ水と引の得手勝手論だ夫に就ては私が書て置た物があるのら一寸讀で聞せやう先づ氣と落附て聞が宜しいト 懷のら何やら書た物と出して讀出すと聽ば

夫れ酒は健康と害し品行と亂るゝと以て道德及び衛生の仇敵と爲す往古儀狀なる者始めて酒と造り禹王に献上せしとき禹王は之と嘗て甘しとし後世必らず國と亡す者あらんと宣へり、宣なる哉酒は多量のアルコール質と含むと以て酔は則ち血液沸騰精神麻痺す、豈に恐れざるべけんや、然れば歌舞吹彈の爲に財と擲つる佳妓麗娼の爲に心と迷はすも皆酒の媒妁にして所謂る城廓をも傾むく況んや倉庫に於てとや、傳へ聞く茫魯公質宰相たりしとき其從子杲と戒むる詩中の略に曰く、戒む爾ち酒と嗜む勿れ、狂藥にして佳味に非ず、能く謹厚の性と移し、化して凶險の類と爲る、古今傾敗する者、歴々として皆記すべし、又杉本北亭先生は維新以前の人なるが嘗て酒損の辨なる者と作る其文章は左の如し

劉伯倫に酒徳頌あり、俳人朱迦亦酒徳と述ふ、是に對して上戸と嘲る、酒損辨、

世に酒と云ふものありて、吉凶必らず是と用ひ、如何なる佳き味ひと持るもの

にや、二ツなき命に換ても之と欲し、君臣禮と亂し、朋友交はりと斷とも之と樂しむ、固より天の美祿と云ひ又百藥の長なりと、程よく樂しまば左もありなん、百藥の長たる疑ふべくも有らず、過る時の臍と喘の悔ありて、禍ひ立ち所に至る、倩く上戸の有様と見るに、腹立上戸のヌツハ抜ひ、元の鞘に収り難く、先祖の功に受續し、アツラ知行と棒に振りて、後悔今更先に立す、千代万世も限多あらじと、祝ひ壽ぐ酒宴の席にも、盃のいささつゝのら持もなき線言、染く涙せざ敢ず、言ふては口説き、語りては愛ひ、サモ愁歎に一座しらけ、笑止がらるゝ位上戸、涙こぼすが可笑いとて、法事供養の席とも云はず、高笑ひに腹の機關と脱して、腹の皮よる、臍腰は舌と共にもつれて、立事能はず、漸く下戸の肩に掛りて、覺束なき歩行ふりは、深手負ひたる有様も、斯やあらんと思ひやらる、春の初めの麻上下は、鬘斗目と共に皺だらけ、肩衣風に吹放ちて船印しの如く、又開帳塲の手拭に彷彿たり、對の羽織に對の袴、高股立の若党連は、大路小路と睥

歩渡り、乞食坊主に突當りて、此生醉と嘗られ、女童に囁かれたるは、取も直さず狂氣の取扱ひなり、朝より溜りし田作り練繰敵さ牛蒡に胸と苦しめ、横町の引曲り明屋の格子と力草、買人もなき小間物店と出せば、待もふけたる茶赤犬、お蔭で正月と祝ふも可笑し、何某殿の御内にや誰殿の家来にや、百石給はる向ふ疵、一人扶持にもならばこそ、高い聲では云ひにくき、晴昔の喧嘩の擧れ擧げ轉びて摩剝く頬邊は、落馬の披露に世間と欺むく、屋財家財も飲足で、田畑地面子供まで、飲めども盡ぬ酒の泉、日頃に並べし袂被り、劔菱男山の重ね着に、雲の降る日は如何ならん、霜の降夜は長らん、下戸の建たる蔵も無ければ、現在上戸丸裸なり、半身不随意の中風病は、下戸にも無きには非ざれども、多分上戸の受取にして、早きは卒中半日と待す、永きは三年又は七年、ピッソ、動けぬ野郎の達摩、生涯人の手と守り、居つたなりの兩便には、一家親類まで愛想とつゝす、宜なるかな佛法五戒の一にして、唯酒は置りなし氣に及ばずと、盡すも之と

戒め給へば飲ぬに越たる事はあらじと、伯倫朱迪の向ふ座に居りて入らざる情すれ口とさく事のくの如し

はとゝぎす三聲と三聲下戸の耳

北亭閑人 戲題

とあるが實に此通りだらうお前達も餘り我田へ水と引て得手勝手と云はないで酒は慎むが宜うらうと云へど二人は何の返事もなきも能く見れば二人共に鼻のら提燈と出して熟睡の体も隠居は驚き是は馬鹿く敷無益骨折と爲たりヨシ、此間にツツと抜出て遣んと仕度もそこくにして歸り去れり、暫くして馬鹿は眼と覺し隠居の居らざるに驚いて鹿平と起し二人でキョト、方々と探せども隠居は居らざるも其家で聞ば隠居さんは先刻お歸り成されたと云ひ又勘定はと聞ば未だ頂戴ませんと云ふにぞ猶々二人は閉口し夫ぢやア只酒と飲積りで只酒と飲れたの馬鹿くしいト悔めど今更及ばぬ處から鍋釜燗鼻揮何くれと無く取纏めて質に置き料理

屋の飲代と拂ひし處未だ何程の殘金あるより二人は又候向ふ見ずの了簡と起し鹿
 「オイ馬公をうせ糞焼序に何處田舎の方へ膝栗毛と出掛やうの 馬「宜なア田舎も野ノ
 氣で宜らう早速出掛やうト同氣求むる氣樂者、何處と目當と定めなく、無茶に出歩
 行く旅の空、酔つ泊りの泊りの酔つ、三界無處到る處、是れ我家の心にて、一日片
 田舎と通るとき、鹿平は急に大便の通氣と催ふせしゆる顔と皺めて某茶屋の隅へ飛
 込み、コラへくし溜大便、念佛の聲諸共に、安樂國に往生し、又娑婆還る心地に
 て四邊とキヨロく見渡せば、接し釣し太き繩あり、端は打蕪の解けのりて有り
 ければ合點の行す手と洗ひ、聞は一時の耻と亭主に向ひ 鹿「オイ御亭主さん今自己
 が雪隠へ這入たら彼處の中に太い繩と下て其端が解のりて居た物があつたが彼や
 ア何にするものですト聞ば 亭主「へー彼で御座いまする彼は當所で解けと云つて彼
 の解のりつた蕪の端とチギつて大便とした跡と拭てお尻と清める物で御座いますと
 云へば鹿平は笑ひ出し 鹿「解けと云へば佛と能く似て居るが何と勿体ないやアね

へのと云ふと亭主も笑ひ出し 亭主「ナニ貴方佛で尻と拭位は些細な事都ではカミで
 さへ尻と拭ぢやアありませんの
 ○狗猿の相違
 風は空氣の流動なり、空氣は固太陽の熱によつて膨脹するの性あり、故に一處の空
 氣膨脹し、輕浮上騰するに至れば、其跡と充塞せんとし、他方の空氣之に交はり來
 り、終に流動と生ずるなり、博物新編に風力の徐疾と形容し、載て曰く兩點鐘と一
 時とし、一時にして六里と行ものは、人物覺らず水雲動らず、一時にして三十里と
 行ものは、和暢人に宜しく、水紋起り烟捲く、一時にして百里と行ものは、松竹に
 聲あり、一時にして百五十里と行ものは、芙蓉水に馳し、一時にして二百里と行もの
 の飛燕斜に退く、一時にして二百五十里と行ものは、人吹るゝに耐ず、一時にして
 三百里と行ものは、蓬飛び茅展び帽落ち塵懸る、一時にして四百里と行ものは、万
 竅怒り號び海波澎湃す、一時にして五百里と行ものは、船沈み屋爛れ樹抜け橋傾

一時にして六百里と行ものは、草木皆摧け鳥獸多く死し、砂と飛し石と走らし、物に荒膚なしとあり、又爰に一種の旋風あり俗に辻風と云ふ、是れ空氣暴動して山谷等の固体に衝突し、左右或ひは前後より反旋の激勢、所謂る出合ひ頭途端の拍子にて、打當りては輪轉し、其際女帯などの長さ物の乾あると、螺旋状して、數百丈の高さへ卷上るあり、人其蜿蜒閃々たるを見、誤り認て龍の天上するなりと云ふ、其實は風の左右或ひは前後より、拍合反旋の激勢にて、長さ物と卷上輪轉して上騰するなり、決して怪しき者に非ず、編者も嘗て田野池水の數丈も輪轉上騰すると目撃せし事あり、眞に奇觀にてありき、俗問此理と知らず、魔風と唱へ、狗獾の所爲と云ひ、鼻高さんの惡戯と云ふ、周章の喜六なる者あり、或時四五人の友達と野外と散歩し、之に遇て驚愕し、彼は魔風だイヤ輪風だナニ爾ぢやない舞風だ、と各々争ひ競ひしが、何にも致せ怪しき風なれば、到底狗獾の所爲だ鼻高さんの惡戯だと評議一決して歸りしが、周章の喜六は自慢らしく人に向ひ「喜昨日友達と田

圃の方へ遊びに行たら風がキリキリ舞上ったが彼は魔風に違ひない魔風と云ふものは實に恐いものだト云へば其人も成程と思ひ「某如何様魔風と云ふものは恐いものださうだが全体魔風と云ふものア何の所爲だらうト云ふと喜六は狗獾と云ふ事と忘れて「喜さうサ大方花瓶の所爲だらうト云へば「某〜妙な物の所爲だね」花瓶だア何の事だね「喜お前さんも悟りが悪いねへ花瓶だア花立さんの事サ

○妻女の失言

經に曰く牝鶏の晨するは是れ家の索るなりと、又諺に女伶俐して氏賣損なふと云へり然れども餘り鈍さも困ったものなり、某處に甘井園子兵衛と云へる者ありしが一日外より歸りて其妻お申に向ひ「園子」お前に話して聞せる事があるマア其處へ坐つて聴なさい……今日私しは本屋町の文學屋さんへ行たが彼家の内儀さんは容色は美し性質は柔和だし夫に學問諸藝は何でも心得て居ると云ふ世間の評判だが成はせ世間で評判する通り餘は利口な人だ今日も一寸した事で感心したと云ふのは外で

八十四

もないが茶洲しの土瓶の蓋の撮み手に蛙が二疋附て居たから私しが是は結構な珍らしいお土瓶で御座います然が此撮みに蛙が二疋附て居るとは何だの意味のありさうな様に見受られますが何の理由のある事で御座いませうのと聞たら内儀さんの云はれるには左様で御座います是は昨日上野の博覧會へ参つて歸り路で一才見ました處餘り世間のない形で珍らしいやうに思ひましたのら求もて参りましたが只今お話しの蛙の事に就て妾し何云ふ理由だらうと考へて見ましたが妾しの考へには斯云ふ事ではないの知らと思ひます元來蛙の性質は愚鈍なもので何も是と云つて一ツの蓋も御座いませす只アイ〜と飛で居て頭から水と掛られても平氣で澄アし込で居りますもゆる人の放蕩で異見と用ゐない者と譬へて蛙の面に水なと申します、ケレども捨る神あれば助ける神ありとやら申しまして柳に飛附たが爲に小野の道風に愛せられ古池へ飛込で芭蕉翁に千歳まで残る名吟と詠せしめましたやうに水にも住は陸にも棲るのは誠に不思議な一徳で御座います又茶の功能と申しますものは登高自卑



と云ふ書物の中に茶は消化機と補ひ精神と鼓舞するの功あり然れども多量に用ゆれば却つて消化機と傷る其元素「アーチ」なる者人として眠らざらしむと書て御座います通り人の懶しき心持と醒して爽にするもので御座いますのら其心持と爽にする物と煎じる道具に蛙と二ツ附ましたのは茶の能く煎立と云ふ印に煮るへる又沸るへると云ふ心持で附たののと思ひますと云はれたが實に彼の内儀さんは發明な人だお前も彼の内儀さんに見習ふて万事に氣と附るが宜と云へば山の神殿は脹れ面として嘲笑ひ 女房「又初まつた面白くないお前さんは何ぞと云やア彼處の内儀さんが何だの此處の内儀さんが何したのと他家の内儀さんの事は有り譽て居らア面白くもない妾したつて煮るへる沸るへる位な事は何でもありやアしない朝飯前の仕事だト早速上野の方へ出て行て何處とぞう探したる彼の蛙二疋の土瓶と買來りて亭主に向ひ女房「さア今日は妾しの器量と見せるのらお前さんは奥に居て様子と聞てお出なさいと云ふにぞ亭主の團子兵衛は呆れ返りたれど何様な事とするの聞て居るのも亦た

一興と女房が云ふが儘に一間へ引込で知らぬ顔として居れば女房のお串は此處ぞと一生懸命に茶と煎じ誰の來さうな者だと待と暮せと約束なければ誰も來らざるに女房はチレツたく思ひ門口へ出て往來の人と呼び 女房「モン旦那茶が道入ました一杯呑で入ッしやいませと云へば往來の人は膽と潰しオヤ／＼妙な處へ水茶屋が出来たイヤ水茶屋ではない彼は何でも狂印に違ひない危険／＼障らぬ内儀さんに崇りなしと皆々足と早めて逃行にぞ彼の山の神はハテ困ツた事だとボンヤリして居る處へ日頃茶好の宇治屋の隠居が杖と力にトボ／＼と遣て來るのを見て 女房「御隠居さん只今丁度お茶が這入て居りますのらマア一杯喫了つて入ッしやいませト云へば隠居は日頃大好物の茶と聞て 隠居「ハイ／＼夫はどうも御親切に有がたら夫ぢやア御遠慮なく頂戴しませうと居間へ通り隠居はガフ／＼と頻に茶と飲みながら 隠居「ア是は結構なお茶だ此お茶は鷹の爪の夫とも玉露だらうの何に致せ餘程風味が宜ト頻に茶の事は譽れど土瓶の事は何とも云はぬゆる女房は氣と揉み茶なんぞの事は何で

も宜のら早く土瓶の事と何との云ッて呉れば宜にと故意と土瓶と隠居の前へ突出て
 無暗に蛙の附た蓋と撫くり廻して居るに隠居もヤツト気がつき 隠居「ハア自巳は氣
 が附なのつたが是は餘ほを珍らしい土瓶だ 女房「夫れ來ぞ 隠居「何の來ましたの 女
 房「イエナニ裏のら猫が來たので御座います 隠居「猫はマア來ても宜がハテな此土
 瓶の蓋に蛙が二疋附て居るのは何の理由がありさうに思はれるがハテ何云ふ理由の
 知らんト云へば女房は夫れ來た此處だと思へど此女房は少し振作の質もる羨のへる
 沸のへると云ふ事と頓と忘れて仕舞ひ鳩が豆鉄砲と食たやうに眼ばのりとパチクリ
 くして 女房「へー其蛙には大變譯のあります事で…… 隠居「さうでせう何の譯が
 ありさうだかシテ何云ふ譯ですな 女房「へーその二疋の蛙が附て居りますのは……
 隠居「二疋の蛙が附て居るのは…… 女房「へー夫は…… 隠居「へー夫は何した理由
 ですなト問ひ詰られて女房は困り果て 女房「エ、夫は引練のへる、轉練のへると云
 ふ譯で御坐いませう

○地獄の夢

諺に夢は五臓の煩ひと云へるが如く元來夢と見ると云ふは如何なる次第のと其原因
 と尋ねれば人身頭腦神經の曾て眼に觸れ耳に聞て感せし事が睡眠中に發動して影も
 朦朧首尾も曖昧の事と見る之即ち夢なり故に浮世の事と夢の如しと云ひ又佛家にて
 も泡沫夢幻など云ひ又雪堂禪師も「寢ても夢覺ても同じ夢なれば夢と云ふべし音
 の棄もなし」と説れたり、斯く様々の夢の世の中に果報と寢て待ち起て待つ仕事嫌
 ひの遊び好き大飯食ひ朝寝して夢と樂しむ寢太郎なる者あり、或夜の夢に雲に乗り
 飄々として天半と歩み行のと思ふ中遙のに下界と見渡せば曾て地獄の繪と見し如く
 閻魔大王の口は耳までも裂破れ兩眼はヒカ／＼として電氣燈の如くに光り衣冠束帯
 殿しく側には見る眼嗅ぐ鼻が千里万里も一ト耳目、今流行の電信機傳話機にも劣ら
 じと八方に耳と峙て眼と配る、外と守る五色の惡鬼共は角と振立て鉄棒と突鳴し虎
 の皮の積鼻禪と堅くべて群り來る亡者共の罪の輕重と定め、劍山刀樹焦熱や阿鼻焦

熱や振舌刑、臼にて搗て笑で飾ひ、其外血の池釜熬や、種々の苦患に罪人が、號泣
悲哀の其態は、目も當られぬ姿とば、見るに目もくれ心消ぬ、絶も入るべき心地な
り、寢太郎熟く思ふやう夫れ天地間の動物に生氣活氣は是あれど、凝れば動物散
すれば空氣に歸り神魂も皆飄散する者なれば何ぞ別段地獄など、云ふ處あつて一旦
死したる五体が再び其儘の姿と現はすの理あらんや、漢儒の説に云へる如し死する
者は形既に朽滅し神既に飄散すると以て剉燒香魔ありと雖も之と施す處なし然れば
是は全く夢ならん、昔し莊周は夢に蝶となり俄然覺れば周なり、周の夢に胡蝶とな
るの胡蝶の夢に周となるのと知らずとあり何にも致せ珍らしき世界と見たり、人間
は僅に五十年、夜は寐る故に正味の處は二十五年、其寐る勘定の中にて斯く診らし
き處と見るとい、彼の盧生の見たる五十年の榮華の夢に、反對なれど地獄の夢も亦
た一興なりイザ何するの見届け呉ん、と飄々乎たる雲井より猶も遙るに見下して眼
と配る其所へ新歸の亡者四人連、齒抜祈禱者輕業師醫者と打連出で来る、其顔に

正の印とつけ經帷子と着て杖と突き、白き脚半に草鞋と穿きトホくと来る處と
鉄棒突し鬼が見て大音とあげ鬼「ヤー」者共暫く待て此處は閻魔大王の都なるぞ
、汝等四人の者共は生前娑婆にて犯せし罪業の調べと受よト襟首取て引揃み片手
と以て閻魔の前へ提げ行きぬ夫と見るより見る目喚ぐ鼻諸共に娑婆と見透し嗅廻し
罪の次第と審理して詞と揃へて申すやう「抑く此處へ参りたる齒抜祈禱者醫者輕
業師の四亡者の生前娑婆にて爲せし罪業と取調べ申せし處其罪何れも重く第一齒抜
は人の振すとも宜しき齒まで無理に振て残りの満足な齒まで縦飛せて滅茶くにし
たる罪科あり又た祈禱者は方位など口から出任せの事と云つて今建た家も毀さし
た不埒あり又醫者は人の死るのと何とも思はず無暗に自分の藝と稽古する積りて色
々の薬と飲せ毎年幾人となくと殺したる者なれば三亡者の罪は餘ほ重し只輕業
師の一亡者は前の三亡者に比べて見れば聊ら輕さやうなれども併し此奴は長い竹の
頭に登つて大の字になつたり多くの小箱と積重ねて其上で寝輕んだり誠に劔呑な事

と職業とし若し一旦過ちある時は身体も碎け翠玉も潰れるハ勿論の事既に此度死去
 教せしも矢張り其輕業とするとき五間階子の上のらスッテン轉りと墮落て死たので
 御座います然れば身体髮膚これと父母に受く毀傷せざるは孝の始めなりとの金言も
 あるものと父母の遺体と粗末にして打碎きたるは前の三亡者と略同じき罪科と存じ
 ます因て四亡者と同刑に處し劍の山へ逐上て然るべきやう存じますと云へば閻魔大
 王は苦虫と嘔潰したやうな髻面と豎に動らして大王「如何にも其方の申し立の通に
 に處分して宜らうとの事に右の通りに宣告すれば鬼卒は鉄棒と振立て四亡者と驅
 り立て數万の氷柱と倒逆に植たるよりも猶凄き劍の山へ逐ひ上れば輕業師はオット
 承知と先に立ち輕「習ふより慣よとは此處の事必らず心配しなさんナサア皆さん私
 しのする通りにして跡のら附てお出なさい私しが術と教てあげやうト先に立て輕「
 サテ」扱の輕業は四人で無ければ旨くは出來ないコラ扱ヨイヤ扱サテ」くく
 く」と云ひながら劍の山と面白さうに輕々と登るも跡の三人も其真似として難な

く絶頂まで登り行しとき輕「イヤ皆さん斯早く登ッて餘り面白くないのら今度の
 最少し緩り登りませうと再び麓まで下て又候サテ」扱て輕業はと遣て居るのを見
 て鬼は驚き鐵棒とガラリと落し鬼「是は大變だ此奴ア只者ぢやアない地獄破りが來
 たのに違ないのら油断の出來ないト云なら一目散に閻魔大王の前へ行て其趣を委
 敷上申すれば閻魔大王も大に驚き大王「夫では仕方が無い左様な者と打棄て置ば
 如何なる事と仕出のすのも知れぬゆる早速に釜へ放り込で煮て仕舞との命令に大勢
 の鬼共は畏まりましたと彼の石川五右衛門の處刑より猶千万倍も大きな釜と居へ
 ドン」くと焚て熱湯の中へ四人と放り込んとすれば祈禱師は心得たりと第一番に進
 み出て放り込れ兩方の指と握ッて呪と唱へ瀉水の印と結べば熱湯は俄に水となり殘
 りの三人も膚に粟と生ずる寒さに驚愕驚天し「ア、冷たいオ、寒い」是や堪らん
 此様な水の中へ這入て居ちやア風と引さうだ……鬼さん何として居るのだ最少しど
 うの焚て下さいナ夫のら石輪と三ツ四ツ買ッ來て貰ふ事は出來ますまいの……ッレ

せん大王の仰せも多四人の亡者と吞ふとすれば齒抜が来て是れ此通り齒は残らず振
て仕舞ひ夫の無理に吞ましたら御覽の通り布袋和尚が脹満でも煩ったやうに腹水
テになつてビクとも出来な上四人の中に數醫者が居つて臆や咳や嘔や欠伸と爲せ
たり或ひは面白くもないのに笑はせたり悲しくもないのに泣せたり放屁とさせたり
頭痛とさせたり果は踊りの稽古場同様にドン／＼／＼／＼／＼／＼と苦痛の体と見
腑が張裂るやうで苦しうて溜りませんアイタ、／＼／＼／＼／＼と云へ
て大王も困り入り 大王「是は何にしても困ったものだが何したら宜らうのと云へ
ば 黒鬼「モウ仕方がないから今度の貴方を吞して下さいト云ふもゑ閻魔王はビクク
リして大王は怪のらん事と申す拙者と吞で河致す積りだ 黒鬼「ハイ大王と吞たら
下るだらうと思ひまして

○体盡し

御隠居さん今日は 隠「誰だい 猪「ハイ自己で 隠「自己では分らないが誰だい 猪「ハ

イ猪尾公で御座います 隠「何だ自分の事と猪尾公だのと 猪「夫でも皆なが自己の事
と猪尾公／＼と云ひますのら 隠「何でも宜らマアお上り 猪「夫は御馳走様で 隠「誰
もお前に御馳走とするとは云や仕ないぢやないの 猪「イエ今御隠居さんが飯食れと
仰しやツたでは御座いませんの 隠「お前は何ぞと云ふと直に食事に宿るのら困る今
私しが云ツたのは飯食れと云ツたのでは無いマア此處へお上りと云ツたのサ 猪「さ
うですの其奴アお禮の云ひ損とした…兎に角上る事に致しやせうが隠居さんの家
には化物は居りやせん の 隠「馬鹿な事と云ふ人だ誰がお前化物と畜て置ものらね 猪
「ヘー化物は畜てありやせんね夫ぢやア御免と蒙りやせう…ヤットまのせの七、
兵となブー 隠「大層仰山な坐やうぢやアないの夫に他所の家へ来て無遠慮に胡坐と
組たり氣儘に屁とするとは失禮千万な 猪「夫でも自己やア是が勝手ですのら 隠「勝
手なら勝手に宜ら御免下さいとの免して下さいとの何との挨拶とするものだね 猪
「然ッて御隠居さん世間の人も能くさう云ぢやアありやせんの出物腫物は處と嫌は

ずつてそのら沈香も焚す屁も放らすのボンツツよりの自己のやうに大飯と食つて大
 屁と垂る方が人間の中でも上等でせう 隠「アハハハ、お前は口から先生れたら何時
 でも口から出放題と喋々嗚々と能く饒舌る人だ夫で能くマア生活が立て行たものだ
 全体お前は何して暮して居るね 猪「御隠居さんは是が見へやせんかね自己やア此處
 に斯坐つて暮して居ります 隠「夫は云はなくても知れて居るが商賣は何として居る
 ね 猪「自己の商賣ですらね自己の商賣は女房と合して七商賣で…… 隠「ム、夫は成
 心だマア其七商賣と云ふのは何と何として居るのだね 猪「七商賣と云ふなア先づ女
 房が人の洗濯物として鐵と儲ける是が一商賣夫のら自己がフア〜して無商賣たの
 ら合せて七商賣 隠「ソレ其様な馬鹿と云ふのら困る全体其無商賣で何してお前は飯
 と食て居るね 猪「何してつて自己だつて十八並の人間ですら左の手へ茶碗と持て
 右の手に持た箸でムンヤ〜と七八杯位はパン附ます 隠「茶碗や箸の持やうは
 聞なくても知れて居るが其茶碗の飯は何のら入るへ 猪「何のらつて飯櫃のら杓子で

入れます 隠「夫も知れて居る事だが其飯櫃へは何のら入れる 猪「何のらつて夫やア
 釜のらでさア 隠「夫も知れて居る事だが其釜へは何から入る 猪「米櫃のら 隠「其の
 米櫃へは何處のら入る 猪「夫やア米屋のら来るに限つて居ます 隠「なるは其米屋
 の勘定は何するのだへ 猪「大概踏倒して遣ます 隠「ソレ其様な了簡のら困るヨ世
 の諺にも坐して食へば山も空しと云つて山は金があつてさへも何にも仕ないで
 食て居れば仕舞には貧乏になると云ふ位だのに況て貧乏な上に遊んで食て居る日に
 は逆も溜るものではない然らね前も是の骨と折て勉強してチト金と溜る工夫と
 したら宜のらう中庸と云ふ書物に、博く之と學び審み之と問ひ慎んで之と思ひ明
 らに之と辨へ篤く之と行ふ、學ばざるあり之と學んで能くせされば措す、問はざる
 あり之と問ふて知らざれば措す、辨へざるあり之と辨へて明らにせされば措す、行
 はざるあり之と行ふて篤くせされば措す、人一たひ之と能すれば己れ之と百度し、
 人十たひ之と能すれば己れ之と千度す、果して此道と能すれば愚のなりと雖も必ら

す明のに柔のなりと雖も必らず強し、と云ふ事があるが是は誠に金言だお前も之と
 拳々服膺するが宜ト云へは猪尾助は長欠伸として 猪「隠居さんの仰しやる事は何だ
 の陳奮漢粉唐人の寢言で自己にやア些ども分りやせんが大概何でせう商賈に精と出
 せと云ふ事でせう……成はと御隠居さんの仰しやる通り自己も是のら商法と勉強す
 ると規則と極やせうマが夫にしても先立ものは〇ですのらお易い御用だが商法の開
 業費として一寸百圓は有り貸て下さいやせん御返金は無利息の年賦の又は此世で
 返さ無けりやア彼の世でお目に掛ったときにお返し申しやす……御隠居さんも御承
 知でせう「前の世に借たるものと今済する只今貸て後に取るのの」と云ふ歌と夫の
 ら又積善の家には餘慶あり積悪の家には餘殃ありと云つて人と助けて置やア其徳が
 自分の身に報ひて來ると云ふ事も有りやそのらねへ御隠居さんお易い御用だが百圓
 は有り借て下さいやせん 隠「能くノベツにペラ〜と饒舌る男だ全体人に物と借
 るのにお易い御用だがと云ふ奴があるものゝ失敬千万な併しながら過つて改むるに

憚る勿れた以後改心して勉強とするなら金主の出来る世話と仕ない事もない所謂
 富は屋と潤ふし徳は身と潤ふすだのら自己がお前の内へ千兩箱や諸道具と眞物と見
 へるやうに繪に書て遣ふ再すれば金主が一目見て此家には抵當の道具が澤山にある
 と思つて千圓や二千圓は直に貸て呉る是が即ち金主と釣出し六箱三路虎の巻たソ
 で先づ五十錢遣のらは是で奉書の紙と買て家の中とペラ一面に張て胡粉と十分に塗て
 乾のして置が宜ト五十錢札と出して渡せば猪尾助は大喜びで 猪「其奴ア有がたう御
 座います夫ぢやア何分お頼み申しやすとツイシカ云つた事のない禮と云つて歸つて
 夫のら隠居の云つた通り奉書の紙でペラ〜と無茶苦茶に張廻し其上と胡粉で塗て
 待て居ると隠居さんは夫の乾いた時分と見計つて來て千兩箱の積重なつた處や又は
 金銀紙幣の散のつて居る模様などと書き其外笠筒長持袴羅錦縞の衣服等を書散し夫
 より臺所の戸棚鼠入す膳椀皿小鉢鍋釜の類と書き又二ツ 竈にドン〜と火の燃へ
 る模様まで物の見事に書終りて隠居は莞爾と笑ひ 隠「サアどうだ猪尾公旨く出來た

らう是なら乾度金主が出来るに違ひないマア當とせずにて居るが宜ハイ左様なら
ト立歸れば跡で猪尾助はニコニコ顔急に寶船にでも乗た氣でマツと富貴風と極込み
先づ一晝寐して見やうと石と爛らす大暑にも構はず肱と枕に一睡し盧生の夢と逐ふ
所へ晝寐と覗ふ小泥坊が來り大釜に下にドン／＼と火の燃ると見て 泥「オヤ此大暑
中にマア彼様なに火と燃て嘸熱いだらうイヤ熱い處ぢやアない彼様なに火と燃て居
ながら奥で野ノ氣に晝寝として居るとはサテ／＼不用心な事だト泥坊ながらも心配
せり（ソコで編者が例の筆癖ながら聊の火の燃る理合と附記すべし扱火の燃る理は
温素と光素と妙合し温素は幼微精緻なる物質にして能く万物の分子の間と廣透し其
物として擴張緩散せしむる者、光素も至極幼微なる物体にして周く六合に充滿し
縁に觸て發動す、温素は觸て之と知り目にては視へず、光る素は目に視べくして觸
れども一向知れず殆んど越素の作用に似たり、唯温素のみは温と云ひ又熱とも云ッ
て火とは云はず、人畜の体中に在る温氣又滾湯の熱等はなり、又光素のみにて云ふ

ときは、光りと云ッて温とも熱とも云はず、螢火夜光木の如き是なり、温素光素と
妙合し、酸素と得て其形と現し、燃るもの初めて之と火と名く、然れども三物相集
ると云へども可燃物なければ、亦獨り燃る事能はず、可燃物とは炭素と含む物品に
して則ち柴薪油脂樟腦等の如き者是なり、此物能く漸浸に酸素と輪るもる則ち燃る
なり、物の燃る理は燃体中の水素と空氣中の酸素と合し、温素の爲に燃て水蒸氣と
なり、其炭素の一分は又酸素と合し、炭酸氣となりて飛散す、炭酸氣は火の活氣に
して、日に映じて陽燄の如く、閃々たる者是なり、而して炭素の燃る時は、爐煤
となりて上驕する者なり）泥「これと打棄ッて置て若もの事があつた時には此家は
ありの近所近邊は皆灰になつて仕舞……是は危険一寸氣と附て遣ふト泥坊ながら心
中に天性惻陰の情と發して内に入り、只見れば個は如何に奥の間には十四五の千兩
箱が高く積上て中には蓋が開て金銀紙幣等の溢れ出て居る様子に泥坊は驚愕しイヤ
此奴の大變な金だ有所には斯もあるものゝと例の悪心が再發し 泥「全体自己は此處

へ何としに来たんだらう何としに来ッて泥坊に來んだ泥坊に來として見ると義理として無手では歸られないから彼の千兩箱と二ツ三ツ持て行ふマが彼の箱と持て行にやア大風呂敷の何の、一ツ欲しい物だが風呂敷は何處にあるの知らふ、彼處の單筒の長持の中に這入て居るに違ひないト單筒の引出に手とつけて引出さうとすれば壁で手とコツンと打て泥「アイマ、、此奴ア一杯食せられた金だと思つたら皆な繪で書てあるのだ何だ馬鹿くしいマが折角仕事と始めのけて此儘で歸るのも強腹だのら責ては盗んだ体なりとして歸らうト行なり單筒の環に兩手とつけ泥「是で抽斗と開た体……是で大風呂敷と出した体……是と座敷へ廣げた体……千兩箱と二ツ三ツ盗んで此へ載た体……大風呂敷に包んだ体……夫のらヤットコサと背負た体……善び勇んで歸る体ト獨語く立歸るのと猪尾助は其前より眼と覺して様子と窺ひ居りしが泥坊の体盡しは甚だ面白しと我と忘れてガバと刎起き猪「イヤ手前は中々面白い泥的だ自己も一ツ体盡しと遣ふ先づ是が棒と十字に揉る体……袴の股立絞る体……

長押の鎖と取た体……リウくくとすこいた体……ヤアく曲体其處動くなど横ッ腹とスプリと突通した体ト云へは泥坊はコロりと打倒れて泥「是で私が死た体

○枕賣の危難

京都五條の邊に住める喜六と云ふ者あり、仕事が嫌ひで遊びが好き、心と酒食の慾に奪はれ魂と花柳の巷に消す喻へは混堂に釣たる櫛櫛にアラ下りたる風鈴の如くアラく然として日と送る、坐して食へは山も盡く、況て固より貧乏の尻に火の附く苦しさ、家に住む事も出來難くなりしより、東京神田の某隠居と便りて頼文んと、旅の支度と調へて彼の大石おあらねども、頃は小春の末の空、京都と立て五十路餘の關の東へ向ひつゝ、未だ見馴ぬ旅の空、聞なれざりし波の音、とり様を多さ中に、名にし近江の湖や、波も長閑に漲渡る、霞にのゝる鏡山、四方の委や寫すらん、瀬田の長橋うち渡り、弓手に見へし三上山、昔し孝靈天皇の五年となん、富士の高嶺と諸共に、一夜に出現せしとのや、旅の勞れに皆人の、老會の森の下草も、殊

く思ひや高見山、小野が宿より打續く、番場醒が井柏原、不波の關屋に荒れる、稀
 疏の軒に降る雨も、笠着てぞ行く美濃の國、尾張の津にも入ぬれば、頃は小春の日
 の蔭も、利生も厚き熱田の宮、辱なくも御本地は、俱利伽羅大將不動尊、是れ神代
 の其昔し、東夷の難と防がれし、草薙劍の御寶なり、日とは重ねて行はせに、故郷
 も遠く鳴海瀉、問屋場にくそ着にけり、三河の國に名も残る、八ッ橋今に在原や、
 夫は昔しの戀路にて、夫は引のへ我は又、貧の苦痛の旅の空、東へ急ぐ矢矧川、雪
 らと紛ふ白須賀の、紅葉ならぬは四ッ五ッ、一ッ二川越行は、爰は何處と遠江、濱
 名の橋の橋杭も、淵瀬の名さへ高し山、佐夜の中山夜泣石、落る涙は夜の栗、淺田
 の露に百年の、齡ひと延る菊川の、流れの末は大井川、島田藤枝岡部より、宇津の
 山邊の現にも、夢にも人に逢ぬぞと、下の細道分越て、三保の松原清見寺、薩田峠
 の夕景色、三國一の詠めぞと、眺めやりつゝ行はせに、枯野とぞなる裾郡、思ひ出
 せはつまさるゝ、頃は建久四年の夏、御狩の陣へ仇討し、曾我の社と伏し拜み、明

て嬉しき玉櫛笥、箱根の山に足留て、遠近方と眺むれば、緑立添ふ金時山、乳母が
 峯、誰が織のけし裾機山、關と後に越行は、黄昏ちのさ小田原や、早く隠居に大
 磯と、思ひ立矢の虎が石、末の御法は藤澤や、誓ひ尊き遊行寺、嬉しの森の假名文
 字も、ヤットいろはに程が谷や、爰に願ひは神奈川臺、今は旅路の夢醒て、所替れ
 は品川の、名も高輪や東京の、花の都に着にけり、喜六「ハイ御隠居さん御免下さ
 いまし 隠居「誰だへ 喜「ハイ京都の喜六で御座います 隠「誰のと思つたら京都の饅
 頭屋の 確の……是は珍らしいサア此方へ上りなさい 喜「ハイ御隠居さん御機嫌
 宜しふ……時に早速ながら伺ひますが只今御隠居さんは私しの事と饅頭屋の 確と
 仰しやいさしたガナせ私しが饅頭屋の 確で御座います 隠「夫はお前のやうな怠惰者
 とアソツクと云ふ事サ大方今度の上京も碌な事ではあるまいノウ 喜「ハイ御推察の
 通り私しのトウノお目出度身代と棒に振まして何にも斯にも働さが取れない處の
 ら御隠居さんと便りに参りましたので御座いますのら何分にもお頼み申します 隠「

ソレ見た事が夫だゝら私しか以前西京に居つた頃に其様なに怠惰では行ないチト商賣向の事と勉強するが宜と毎日一口五月蠅云ツて聞したけれど何がさて私しの云ふ事と一ツでも聞はこる馬の耳に念佛蛙の面水で何とも思はないゝら愛想も盡て居たが君子は其罪と憎んで其人の憎ますだサウ泣附て来られて見れば万更打撃ツても置まい私しの及ぶ丈の事は力になつて上やうのらは是のらは魂と入替て一勉強して見るが宜ナニ人間は七轉び八起だ精出して骨と折さくすれば稼ぐに追付く貧乏なして再び本の身代になる事もあらう然が何の是を斯して見やうと云ふ目的があるのね 喜「イエ何も目的と御座いませんで 隠「目的はないと夫は困ツた何に致せ當時は日々に開けて行く世の中を逆も並大抵な事では金は儲るらない何でも人の氣の附ない事と遣なければ行ないテ……ハテ何の思ひ附の商賣がありさうな者だが、あるく斯したら宜のらう先づ私しの考へには俳優の定紋と附た枕と買て歩行たら宜らう爾すれば東京の婦人は俳優狂氣だゝら彼方でも此方でも引張メコで妾しや新

駒が宜との妾や松島屋が宜との云ツてズンく品物が捌るに違ひないゝら爾しては何だへ 喜「なるは是は面白い商賣で御坐います殊にお客は皆別嬪と来て居るゝら強氣です夫と何の是非遣して下さい 隠「ソレモウ別嬪と書入にして居るゝら困る口然が遣て見る氣があるなら遣て見なさいと云ふので若干の資本と貸て遣と喜六は雀躍として早速隠居の差圖通りの枕と仕入れ毎日「エ、枕はよしのな俳優の定紋附の枕」と吐鳴て歩行と誰しも珍らしい賣物もゝる彼方ゝらも此方ゝらも枕やさんくと呼込れる中に或る家の細君に呼込れ是が成田屋だの是が音羽屋だのと色々の枕と取廣げて居る處へ此家の主人が歸り来りて 主人「間夫見附た其處動くなト行成り喜六の胸倉と引捕いれば喜六は驚愕仰天して 喜「是は迷惑千万私しは往來と賣り歩行く枕商人で御坐います夫と間夫と仰しやるのは何ぞ借な證據でも御坐いますト云へば主人は益々怒り 主人「知れた事主のある女房に枕とカハセに來ではないの喜「成はは枕と買せには來ましたが併し未だ寐は(直は)致しません

○長吉の機轉

或る質屋の主人が新年の賀と祝するとき家内一同の者と呼集めて 主人「私しが今」大福や七福神の取巻」と云ふ上の句と詠だが是へ誰でも下の句と附て御覽ト云へば番頭の久兵衛が進み出て 久「私しが其下の句と附ませうエ、ト……何と附たら宜らうエ、ト……、出来ました出来ました」貧乏神の出處はなし」と是では何で御座いませう可なり追付やうですね「大福や七福神の取巻て貧乏神の出處はなし」と何でせう追付ますまいのト云へば主人は大層に怒つて「主人お前は時々其様な馬鹿な事と云つて人と愚弄て困るヨ春早々のら貧乏神の出處はなしなぞ、は甚だ延喜が悪いぢやないの 久「イエ旦那其様なに御立腹と成さいますな元來貧乏神がどうしたと云つて福の神が斯したと云つて歌の善悪には些とも關係は御座いません只其實は家業と勉強するのと怠惰るのに因て貧富の別が出来るので御座います例へば神棚へ貧乏神と祭つてお燈明とあげて置ても家業さへ惰怠すに稼ぎさへすれば金は自然

に出来ますし又イクラ寶船の中に寝轉んで居ても家業と怠惰て遊んで居た日には何時の間にも貧乏になつて仕舞ます然らば驢にも稼ぐに追付く貧乏なしと云ひ又古人の戒め句にも精出せば氷る間もなし」水車と云ふ事も御座います然ると此處の道理と思はないで怠惰て居るときには「貧乏の棒が次第に長くなり振り廻されぬ年の暮のな」と云ふ境界に陥りますソコで此貧棒の長くなつたのと折には「人は唯この辛抱が大事なり彼の貧棒と敲き折るべし」と云ふ句のやうに辛抱の棒と大事に握つて居れば貧乏神は其威に恐れて居堪れない處から屹度逃去ます之に引替て家業と怠たり酒色に耽るときは七福神は扱置て一福神も居て呉ません故に酒色は性命と断の斧だ財産と割の利劔だと思つて居れば宜しいで御座いませうソコで又た平生養生の心得方と一寸申して見ませうなら色と欲とは湯婆、乾天、燒敷、綿、瓢箪、燈心、羽根、はどに軽く思ひ氣分は「牛の尾に鯛食つた蛇ふらり三尺帯に丸ぐけの紐」と云ふやうに長く持ち胸の中は「武藏野に廣がるはどの梅の花天地に響く鶯の聲と云

ふやうに廣く持ち志しは「須彌山に腰打のけて詠むれば足の下にて旋る日月」と云ふやうに高く大きく持ち心は「罌粟粒の中くり抜て家と建窓の明りで伊勢曆讀む」と云ふやうに極小く持て怠りなくセッセと勉強すれば則ち煩惱即菩提「田の草と取て突込む菩提のな」の奥意と悟れば真如の月は輝きて家業は必らず繁昌と致します然れば禍福吉凶何事も其身の勤むると怠るとに基き福の神と貧乏神とは唯其人の行ひに依て来るもので「傀儡師胸にのけたる人形箱佛出さうと鬼と出さう」と古人が詠まれたのも矢張り此處の事で貧と出さうと福と出さうと唯一身の勤怠に因るので御座いますト辨舌滔々と述べれば主人も大るに感心して主人「イヤお前の話して胸がスツカリ開いたカア是のら目出度屠蘇と酌んと家内一同座と携へて嘉肴珍味と取揃へ杯は順に巡り逆に飛び暫し世情と怠るゝ愉快は實に、長生殿裏春秋富、不老門前日月遅」の心地して興に乗する歌樂和合種々なる藝と盡す中主人は筆と執て「兩國の橋の上なる人込に馬車や人車の二ツ三ツ四ツ」と詠すれば女房は之に次

で「奥山に咲後れたる糸櫻小枝に苔二ツ三ツ四ツ」娘も之に次で「友達に手紙と送る其時に知れない文字が二ツ三ツ四ツ」息子も之に次で兩國の橋の下なる涼み舟花火の仕掛け二ツ三ツ四ツ」番頭も之に次で「一日に質の出入の多ければ問違のわる二ツ三ツ四ツ」權助も之に次で「野馬めがヒ、ひんとなく其時に腹の太鼓と二ツ三ツ四ツ」小僧の長吉も之に次で「お使ひの道草食た其時に拳固の数が二ツ三ツ四ツ」お三どんも之に次で「澤山にお蔭と食た其時はトンダ放屁が二ツ三ツ四ツ」と詠じければ主人は大層喜び主人「イヤ何も皆よく出来たが中にも長吉の拳固の數と二ツ三ツ四ツなどは至極宜と譽れば長吉は圓に載て是奴ア占た此圓と外さず主人の氣に入れば一年に五六度位は宿下に行ると頻に氣と利して何事も先へ廻り所謂の靈と云へば槌ツトンと鳴は膳と出すやうな機轉なり、折のら主人は腹痛と催ふして顔としのめ手で腹部と押して居る様子を見て長吉は直様飛出して表へ出で暫く立て歸りしめる主人は不思議に思ひ主人「長吉手前は何處へ行て來た長吉」へ「且那が只今

お腹と押てお出なされたら大方お腹のお痛いのだらうと思つてお醫者様と迎へに行つて参りました主人「この馬鹿が其様なに大した事でも無いのに仰々参取斗ひとする奴だト小言と云つて居る所へ醫者殿が黒縮緬の羽織とペラ／＼として来りしもある止と得ず客間へ通し先刻より少々腹痛と覺へるの事と述べれば醫者は其病症と診察するに使ひの云つた口上とは丸で違つて居るもゑ頭と傾けて其理由と考へて居るので長吉は見て居て又候表へ飛出して行き暫く立てウシ／＼と云ひながら大きな棺桶と擔ひで來のに主人は驚いて主人「コレ長吉夫は何だ棺桶ではないの新年早々のら延喜の悪い其様なものと何處のら持て來た長「ナニ只今ね醫者様が六ヶ敷さう顔として考へて入ッしやいましたのら大抵全癒ないのだらうと思つて早手廻しに棺桶と持て参りました主人「さう云ふ馬鹿な奴だ實に呆れ返つて物も云へないツナ棺桶はのりの外にも何の買たる長「イエ外には何にも買せせんが足序にお寺様へ案内として参りました

○幫間の腹針

鼻紙と出すに幫間は笑顔する「笑顔の花と翠樓に毎日咲すべラ大盡不夜城中の自由權、皿に一八抜八の、幫間末社と呼寄せて、花柳の樓に流連の、愉快は底なし天井抜け、「身体に換て樂する人もあり命に換て金持もなり」世は様々の人心、兎角淨世は色と酒、色と欲とが染分の、手綱に鞭の一足飛び、地獄の沙汰も金次第、素氣に振ふ大盡が、幫間末社と金銀の、花に飽せて逐ひ使ひ、違背する者更になし、嘉肴珍膳堆く、鯛は酒に躍り、杯は席に飛ぶ、飲や謠への太陽氣、種々の遊藝盡させる、大盡更に勇と鼓し、幫間の一八呼び出して大盡「オイ」一八手前に一ツ注文する事があるが何だ遺るの「一八」へん旦那へ遣るのと何でケスめとは人と疑ふの癖でケス何の遣て見ると云つて戴き度ものでケスな憚り様ながら斯見へても一八の先祖は銅島騒動の猫と云ふ譯では無いのでケスが御注文ならニヤンでも遣てお目に掛ます 大盡「さうの夫ぢやア太閤記三百六十巻と今日の前で讀んで聞して呉れ「一八」何

でケス太閤記三百六十巻と今貴方の目の前で讀んでます……此奴ア驚きやしたね
大盡ハッレ見る出来まい其様な活智のない事で能く勘間が出来たものだが出来な
いやうな活智のない者はモウ直に歸ッて貰はふヨ 一八「オット旦那へ暫く〜お待
下さるべし亡君の恥辱とあらば何の御勘平と願ひやすエヘン左れば是より太閤記
三百六十巻の立讀初まり〜と有合の基盤と假に机と爲し席と構へて扇と叩き鳴し
一八「エヘン、ウツン、頃は何時なんめり天正の元祿の其邊の事は何でも宜として
サテ尾州愛知郡の日吉丸は幼き時より凡ならず、人となつては猶更に智仁勇兼備り
駿河の國今川義元の幕下に屬する松下隆に身と寄て、ゆりの色の藤川に、伊東
と討て初陳の手柄と爰に置土産、再び歸る、故郷に尾張で織田上總介信長公の御持
先、召出されて漸潜龍の、時と得たるや桶狭間、美濃征伐に勳功なし、喰へば草と
吹風の如く、數多の敵と切なひけ、又或ときは中國探題の役、名も高松の水攻や、
取て歸して主の仇たる光秀と、小栗栖村の竹の露、打邊の方に賤が嶽、鬼と呼ばし

勝家も、今は柴焚く灰となり、初めて四海掌握の、萌しと顯す羽柴筑前、名は朝敵
の果までも、武門の神と崇められ、慶長三年八月十八日、露と置土産と消ぬる我身
のな、難波の事も夢のまた夢、サ一テ是で太閤記三百六十巻の讀切で御座いと滔々
と辨じければ大盡も大のに感心し 大盡「イヤ手短の讀切り首尾調ふて能く出来たッ
レ是は當座の纏頭だト若干の金と遣れば一八「ニコ〜顔で 一八「ヘイ是は何も
近頃御丁寧様に恐れ入やしたお止なさら無ければ宜しいにアハ、ハ、ハ、と言ふに
伴て大盡は又皿八と呼出し 大盡「オイ皿八モウ色々と藝と仕盡して面白くないら
今度は自己が新發明の遊びと考へ出した夫は斯云ふ趣向だ自己が習者にあつて一八
と供に伴て見舞に来るのら皿八は病人になつて奥の寝て居れ夫のら扱入は嫁になつ
て應接するのだッで又自己が病人に針として遊ばふと云ふのだがナント面白のら
う 皿八「其奴の御免と蒙りやせう 大盡「ナセ〜 皿八「ナセだつて旦那針と差れり
やア痛いでげせう 大盡「夫やア些たア痛いサ 皿八「夫れ御覽じる其様な痛い役廻り

は先づ御免と蒙りやせう 大盡「夫ぢやア斯しやう一本の針に附て一圓ツ、遣がせう
 だ夫でも嫌の若し夫でも嫌と云ふならば其様な末頼母敷ない者は自己やア大嫌ひだ
 ろら今度自己の處へは顔出として呉るなト云ふので皿八も愈々當惑し且那に見限ら
 れてはお飯の食上と思ふもゑトウ〜承知して 皿八「宜しう御座います皿八は儘に
 病人の役と勤めやせうと云ふので愈々役割も極れば大盡は醫者の姿にて一入と供に
 連れ立關のら甘口羊羹の御見舞と觸込ば扱入は女房の姿にて立關へ迎ひに由で顔と
 見合して思はずもアハ、と吹出ば 大盡「コレサう言ッては行ないヨと澄ア
 込で奥へ行 大盡「コレサ毎度お見舞下さいまして有がたう御座いますと云はない
 扱入「是は毎度お見舞下さいまして有がたう御座います 大盡「せう致して扱御病人
 は如何で御座るな 扱入「何共御座いませんビチ〜して能く大飯と食ひます 大盡「
 コレ〜其様な挨拶では困るぢやないの先づ〜お蔭様で同邊で御座いますと云は
 ないの 扱入「先ず〜お蔭様で同邊で御座います 大盡「左様で御座るのコレ〜

察として進せやうト小首と傾て脈と取り 大盡「ハ、ア成ほど大分脈が宜しくなつて
 来た 皿八「ナニ初めッのら宜しい方で 大盡「其様な事と云ッては行ないヨお蔭様で
 宜しくなり成りましたと云はないの 皿八「お蔭様で宜しくなりました 大盡「夫ら
 お腹と一ツ……、腹部に緊急がある針と一ツ打て進せやう 皿八「夫の御無用にし
 て下さいませ 大盡「御無用で行ないヨ然るべくお願ひ申しますと云ふのだ 皿八「
 然るべく願ひ申します 大盡「ハイ〜と落附て懐中より金針と取出して腹部へ一
 本突立れば 皿八「アイタ、は、是の一圓での安いものだアイタ、は、 大盡「マアお
 静に成さいナニ痛いと言ッた處がホンの初まりにチクリとするばありト云ひながら
 續け打に四五本突差ば皿八はアイタ、は、〜と悶へ苦しむる大盡は慌忙て五六
 本の針と一所に握ッて扱をとすれを扱ぬる 大盡「ハ、ア是は肉が卷付たも見へる
 と云へば皿八は猶々苦しき様子と爲し大聲とあげて泣出すに大盡は益々〜狼狽し力
 と極めて五六本の針と一度に引抜く勢ひに腹の皮がメリ〜と云はんばありに



引破れ腹一面に血塗れとなれば皿八は皿のやうな眼と剝出して悶へ苦しむ惨状に大
 盡は殊の外慌忙して懐より金十圓と取出して皿八の手に握らせ雲と霞みと遊離れり
 皿八は金と得て莞爾と笑ひと合んで居る處へ仲居が来て大きに驚き 仲居「オヤマア
 皿八さんお前さん此様な目に逢て全体どうする積りですへ馬鹿くお醫者の道も知
 らない人に針と打れてサ 皿八「ナニ是でも十圓になつたのら宜よ 仲居「十圓になつ
 たのらッてマツツ十圓ばかり貰つたッて仕方がないぢやないの 皿八「ナニサね 仲居「
 ナゼだッてお前さん能く考へて御覽マイコの皮が破ちやア是のら商賣が出来まいぢ
 やないの

○遺言の遁辭

〜イ御隠居さん今日は…… 隠「ア誰のと思つたら平助の是は珍らしいサア此方へ
 上りなさい 平「〜イ御免下さいませ 隠「久しく來なつたが此節は何の商賣として
 居るね 平「エ、其商賣の事に就て色々伺ひ度事があつて參つたので御座います夫は

マア跡で緩りお話しと致しますが何に致せ遠方から参りましたので腹が減て居て溜
 りませんがどうの御飯と一膳戴りして下さいませ 隠「夫は何より易い事……
 コレ誰の其處に居るのい平助に御飯と持て來て遣なト云へば下女はハイと答へて有
 合の品と取揃へ平助の前へ膳部と持來れば 平「夫ぢやア御隠居さん御遠慮なく頂戴
 致しますと箸と取つて凡そ十五六杯も立付たれば隠居も下女も膳と漬して顔と眺め
 て居たりしが食事終りて隠居は平助に向ひ 隠「食事と振舞て置て此様な事と云ふの
 は甚だ身劣なやうだけれどもお前の身の爲と思へばこそ云ふのだが世の縁にも馬鹿
 の大食ひと云ふ事もあり又腹も身の内と云ふ通り食事は動物が生活とするの根原で
 一日も缺事は出來ないのは固よりの事だが併し餘りに度と過して大食しては必らず
 胃腸と損つて病と發するものだ殊に禮儀は人間の爲すべき道で曲禮にも放飯する勿
 れ流飲する勿れと云つてある元來胃腸の力には限りのあるものなのにお前の食事に
 は限りがないお前のやうに大食としては逆も長命は出來ない事の序だのら話しと

して聞せるが食物と口に入ると舌で舟の形ちのやうに巻取り夫のら齒で咀嚼し唾の中
 の揮發鹽と云ふものと「アチアリチ」と云ふものと加へて糜爛熟して小腸に送るスルと小腸には糜碎
 胃液中の「ペプシチ」と云ふものと加へて糜爛熟して小腸に送るスルと小腸には糜碎
 の二液と注いで来て全くこれと醸熟消化して乳糜と製造し之を乳糜脈に送りて榮養と
 する是が「ア」大畧の事で其機活に至つては逆も言語で盡す事は出来なぬ英國の大醫
 の合信氏の云はれたのには人身大小腸の長さ其身より長き事六倍、肉と食ふの獸
 猫獅虎の如きは身より長き事三倍、草と食ふの獸牛羊鹿の類は最も長くして共に二
 十八倍、蛇の類の腸は長さ其身と同じとあり何れに致せ飲食糜爛消化の緊要は中々
 一朝一夕に言盡せるものではない然るに前は大切の身体と粗末にし大切の胃腸と
 損ふのは實に馬鹿な話した然らば此後は能く衛生の方法と重んじ人倫禮儀の節度と
 守るやうに氣と附るが宜夫に前は獸類と好んで食すると聞たが全体何様な獸類と
 食するね平「へー私しやア何でも食ひます凡と天地の間にある四足の物は何に限ら

ず犬でも馬でも猫でも猿でも狐でも狸でも狼でも鹿でも何でも四足と云ふ四足のも
 のは食ないものは御座いませんと云へば隱居は其大言と憤ふり「ア、彼奴の言
 慢と挫りて吳んと 隱「お前は四足の物なら凡と天地間にあるものは何でも食ふと云
 ふが然らば火焼櫓と食て見て貰ひ体がどうだね 平「夫は親父の遺言ですのら是は
 りは食事は出来ません 隱「ナゼだい 平「ナゼだつて親父が平生に私しと戒めてア
 るものは決して食ふと云ひました

○妊娠の祝杯

或處に道樂屋の喜助と云へる者ありしが途中にて日頃懇意の隱居に出逢ひ喜「御隠
 居さん今日は何處へト聲とけられて隱居は腹の中にア、又困ツた奴に出會た彼奴
 め又自己に奢らせやうと思つてイヤに莞爾附て來やアがつたとは思へど素知らぬ顔
 にて 隱「ナニ一寸上の方まで行て來やうと思つて出掛たのサ 喜「さうですの私しも
 丁度上の方へ參る處ですのらお供と致しませう 隱「イヤ私しや下の方へ行のであつ

た喜さうですの私しも矢張り下の方へ行のですのらお供と致しませうと云ふので
 隠居は困り果て陰「お前は私しに奢らせやうと思ふのだらうが私しや今日は其用意
 として來なのつたのら杯一はダメだよ 喜「ナニ私しも今日は奢って貰ふ積りでは御
 座いやせんホンの能いお道連もゑお供とするので御座いますと云ふので隠居は疫病
 神の毛氈にでも取付れたやうに思ひながら仕方なしに同道する途中で 隠「私しや一
 つ此家に用があつて這入のらお前は門口で待て居てお呉と云つて内へ這入ば内儀さ
 んはお世辭たらしくで内儀チャ御隠居さんお珍らしい能く入ッしやつて下さいま
 したアノ御隠居さんにお目に掛つたら申しあげやうと存じて居りましたが彼の昨年
 私しが少々胸の悪い時に丁度貴方が入ッしやいまして夫は悪阻だと仰しやいました
 が本當にお見立の通り妊娠で御座いました貴方はお醫者様の事まで能く御存じで御
 座います今日はホンの心祝ひまで一盞差上たう御座いますのらア御緩りなごつ
 て下さいませ……彼のれ房や有合のお肴で御酒と一ツ持てお出と指圖とすれば陰「

イエモウお構ひ下さいますな併し御妊娠と極つてお目出度この上は別して御養生が
 大切ですよ古へは胎教と申して妊娠とすれば寝るに側たす坐するに邊らず立に蹕
 ちせず邪味と食はず割正しゝらざれば食はず席正しゝらざれば坐せず目に邪色と視
 す耳に淫聲と聴すなど、列女傳に出て居ります又御出産があれば其お子さんの御養
 生方も肝要で御坐います小兒は何分微弱ものゝゑ動すれば病に逢て死亡し易いもの
 で保壽要訣の比例表と見ましても百人生れた中で十歳までに死する者が五十八十歳
 より二十歳までに死する者が二十八二十歳より三十歳までに死する者が十八、三十
 歳より四十歳までに死する者が六人、四十歳より五十歳までに死する者が五人、五
 十歳より六十歳までに死する者が三人、六十歳と越る者が六人と載て御坐います斯
 様に小兒は育ち難く百人中半分は十歳までに死亡する割合のやうに承まはりますの
 らお小兒の御養生は呉々も御注意が肝要で御座いますと話しとして居る處へ下女が
 酒肴と調へ持來れば内儀さんは三ツ組の盃と出し丁寧に兩手と突て 内儀「何も召あ

がる様な物は御座いませんがホンの心祝ひまで、御座いますのら何の一杯石めが
 ッて下さいませ陰「是はどうもお氣の毒様夫では御義縁のため御遠慮なく頂戴致し
 ますと云ふ中に内儀さんは門口と眺めて内儀「彼の門口に入ッしやるれ方はお連様
 では御座いませんのね連様なら此方へお呼申して御酒と一ッ……陰「ナニ彼は下戸
 ですのら決してお構ひ下さいませすなト云ふと聞て門口に居る喜助は聞て彼の陰居り
 飛でも無い事と云ふ辭退としなくても宜事に辭退して此飲扱上戸と蹴散らすとは情
 ないと吐き居るのも知らず内儀さんは陰居の云ふ事と信じ内儀「夫では御飯でも……
 ……陰「ナニ彼は飯と食やふな者では御座いませんのら打棄ッて置て下さいと云ふと
 聞て喜助は脹れッ面として彼の陰居り色々な事と云やアがる飯と食すに生て居る者
 があるもの馬鹿くしい頻にグツグツ居れども陰居は平氣で三ッ組の上の
 小な杯と取て陰居「夫では此小いので頂戴致しませう内儀「イニ夫では餘り小
 さう御座いますのらどうの中とお取下さりませ陰「ナニ是は義縁ですのら小なのが

宜しいれ産の輕いのと祝ひましてと云へば内儀さんは成はせ行届いた御注意と大の
 に感心したる様子と門口の喜助は之と見て成程陰居の事と世間の人が物知くくと云
 ふが彼様な事と云ふのら物知に見へるのだ自己だッて彼の位な事は云ッて見せ無く
 ッてと家へ歸るや否や早々近所と走り廻り帯の祝ひと成さるお内儀さんは御座いま
 せんのと尋ね廻るに或ひは内は産ないと云ふ者もあれば或ひは自己は獨身者だと云
 ふ者もあり或ひは馬鹿だと笑ふ者もあれば或ひは狂人だと嘲る者もあれば喜助は屈
 せず處々方々と尋ね歩行く途中味噌汁と當て腹と陰し髪と亂せし一人の婦人が苦
 しさうに歩行て來るのを見て喜助は喜びツカくと側へ寄り喜「失敬ながら一寸お
 尋ね申しますが前さんは帯の祝ひは成さいませんのと云へば婦人は涙ぐみ婦人「
 ハイ私しは妊娠として居る事は居りませすけれど亭主が長の病氣も夫に取紛れて帯
 の祝ひ處では御座いません喜「夫はお氣の毒だ併し私しが義縁と祝ふて上るのら一
 所にお宅へ参りませうと云ふ婦人は何の事やら分らぬと喜助が涙多無性に鞠めるゆ

る止と得ず自家へ歸れば 喜「酒と肴と出しなさい 婦人「イエ其お酒や肴が買る位なら此様なに苦勞は致しません 喜「是は困った夫ぢやア私しも掛り合だのら此十錢で酒と肴と買って來なさいと云ふので婦人も仕方なく酒と肴と買って仕度とすれば 喜「三ッ組の盃と出しなさい 婦人「其様な物は御座いません 喜「夫は困った三ッ組の盃がないと義縁が祝へないのら家主へでも行て借て來なさいと云へば婦人は迷惑るがら近所へ行て三ッ組の盃と借て來れば 喜「サア是で宜しい〜ソコで彼の昨年私しが少々胸の悪い時に丁度貴方が入ッしやいまして夫は患阻だと仰しやいましたが本當にお見立の通り妊娠で御座いました貴方はお醫者様の事まで能く御存じで御座います今日はホンの心祝ひまで一盞差上たう御座いますのらマア御緩りなさつて下さいませと云ひなさい 婦人「其様な事は些とも存じませせん 喜「マア〜私しの云ふ通りに云ひなさい 婦人「何だの文句が長くて迎も覺へられませせん 喜「困ったなア夫ぢやアマア宜わ夫だけは先マキにして彼の門口に入ッしやるお方はお連様では御座

いませんのお連様なら此方へお呼申して御酒と一ツと云ひなさい 婦人「門口には誰も居りませせん 喜「誰も居ら無くツてもマア〜私しの云ふ通りに云ひ成さい 婦人「彼の門口に入ッしやるお方はお連様では御座いませんのお連様なら此方へお呼申して御酒と一ツ 喜「イエ彼れは下戸ですのら決してお構ひ下さいますな……夫のら夫では御飯でもと云ひなさい 婦人「お飯と上度もお粥より外には御座いませせん 喜「其様な事と云はないでマア〜私しの云ふ通りに云ひなさい 婦人「夫では御飯でも 喜「ナニ彼は飯と食やうな者では御座いませんのら打棄つて置て下さい……夫のらサアお一ツ召上つて下さいと云ひなさい 婦人「サアお一ツ召上つて下さい 喜「夫では御遠慮なく頂戴致しますと以前の事と打忘れて下の一番大きい杯と取り 喜「サア中の宜やうに中のと御取下さいと云ひ成さい 婦人「サア中の宜やうに中のとお取下さい 喜「イエ是は義縁で御座います 婦人「夫はナゼで御座いますト云はれて喜助は心付き見れば大きな杯と持て居るのにハッと驚いて困り入り途方に暮て眼ばのりバ

チツリ〜遣て居りしがセツパ詰りて喜「エ、是と義縁と云ひますのは……婦人」
夫はナセで御座います喜「お産の重いやうに

○放屁の遁辭

京都二條通り筑前屋の格子戸とガラ〜と開て佐「旦那はん今日は……何を旨
い物はおまへんの 且「誰のと思ふたら佐助ぢやないの時の挨拶もせずと口穢い 佐「
時の挨拶チウと何様なもんで…… 且「時の挨拶チウのは此頃は追々寒うなる時節ぢ
やさのい次第にお寒う御座ります四方山に雪が積やして其吹下風で一向にお寒う御
座りますチウのぢや 佐「さうだすの夫なら夏の熱い時分は四方山に火事が積やして
火の子が吹下風すで一向に熱う御座りますチウのでおますのなア 且「馬鹿と云へ汝
は馬鹿で困るチト嗜んで學問なとせんといな當時は開明の世の中ぢやさのい明盲で
は通れぬ、世界は廣し万國は多し天に五星あり地に五大洲あり地球の周圍は一万〇
百九十三里餘、西より東に旋轉して人其動く覺へず故に天象の反つて運轉するや

うに見へるは、恰舟に乗て行とさに其舟が行くの氣が附ず岸上の樹木が皆後に
向ふて却行とするやうに見へるのと同じ事ぢや扱て五行の名に象つた水星は地球体
積より小なる百分の六、金星は同じく百分の九十六、火星は同じく百分の十四にし
て木星は地球体積より大なる一千四百十四倍、土星は同じく七百三十五倍とある
ぢや、五大洲は亞細亞、亞弗利加、歐羅巴、澳大利亞、亞米利加、五大洋は太平洋
印度洋、大西洋、南氷洋、北氷洋、夫ら海の深さは未だ確乎には分らんけれど大
西洋の中で已に四千六百丈の處と測量した事があるぢや、又高山は印度の喜馬拉山
と亞米利加の安得山とを以て一番に高い山としてあるが其峯に頂さまでの直立は二
千八九百丈もあるさうな、チャけれど地球の大きさに比較て見れば四尺の球の面
に二厘六七毛の高さ位なもので高山峻嶺チウても皆橙子の表面の凹凸のやうなもの
ぢやと書てある、斯様に高大な世界の事理と知りたくば汝のやうな時の挨拶も知
らんやうな阿房では行んさのいに此以後は精出して學問と勉強するが宜、今日は汝

が奮發の祝ひに島原の青樓へなと登って淡泊と飲で來やうの 佐「旦那さんセイロウ
 ちうと矢張り蕎麥店の事でおますの 旦那と云ふのぢや島原の太夫と見せて遣ぢや
 佐「男の太夫だすの 旦那云へ男の太夫チウもんがあるもん 佐「無いとは云へ
 まへん其以前は伊勢に神戸太夫、住吉に山上金太夫白太夫、淨瑠璃に竹本越路太夫
 、春太夫 旦那ソリヤ男の太夫ぢや自己の云ふのは艶女の頭ぢや 佐「何で太夫と云ひ
 ますのいな 旦那汝等は其様な知るまい太夫チウのは六ッ敷事ぢや、昔し漢土に秦の
 始皇チウ天子が鷹野に出られ松の下へ雨宿りとお仕なされた時その恩賞として松に
 太夫の位と授けられたソレで松の位の太夫職と云ふのぢや 佐「成は迄再して見ると
 太夫チウものア餘はどエライもんでおますなア……其太夫は何程致します旦那「昔し
 は六十三匁であつたが今は一圓八十錢ぢや 佐「半季で…… 旦那一夜さが 佐「オー高
 い私しが若い時に買ったのは三十二文で毎晩買ました 旦那ソリヤ昔しの淫賣の事ぢや
 其様な下等のもんではない……連て行く島原の七不思議チウて話に社もないのにチ

ンシンあり語りもせんのに太夫あり堂も無いのに堂筋と云ひ、出口と入口、入口と
 出口、上町と下の町下の町と上の町と云ふ……着物と貸てやる……汝と宜家の旦那
 那として洒落て行こ……肌の帯せい 佐「ハ一手拭に紐が付ておますなア 旦那ソリヤ
 越中禪ぢや昔時松平越中の守様が儉約で持へさつたのぢや佐「柔い切でおます
 なア 旦那サア此襦袢着物羽織……オ、能く似合た 佐「是は私しが貰ふて置ましたよの
 旦那阿房云へサア行こサア行こト着物と着のへて二人連れ、五條通りとスツと行
 く 旦那向ふが島原ぢやト主人は得意の家へ這入り 旦那頼むぞよく 仲居「ハハハ
 ……オ、旦那旦那さん能く入りナンス 佐「何と云ふて居る 旦那ナンス、アリンス、入ナ
 ス、是は島原の詞ぢや、夫より主人は仲居に向ひ 旦那今日はお得意先の旦那の供し
 た 仲居「ありがたう……サアお通りヤ 旦那奇麗なもんぢや、間々案内して遣る……
 ……是が梅の間、是が松の間、是が櫻の間、是が竹の間、是が孔雀の間、佐「向ふが
 ヤンマ此方がアンマ、トマリソのの間だすの 旦那其様な間があるもんないサア此處

へとチャンと坐る、床の間には三幅對の掛物、其傍には遠州流に花が活て青貝の臺に居あり、元來斯様な處へ來た事のない俄の旦那の佐助は些とも行儀よく坐つては居れずぬも糸縦横十文字に飛歩き柱に持れて頭と摺付る其様は恰も野馬の庚申塚に縛りつけられたるが如し、其中に仲居が四五人緋縮緬の前掛にて居並び又藝者も來て紫の裙襖襟白襟頭は有難やの佛檀と開たやうに、櫛や笄で光り輝けり 且「今彼の女子等が頭に挿て居る櫛や笄や簪は昔しの相場で云へば五貫目六貫目チヤ金圓な物と乘て居るぢや 佐「五目貫や六貫目は何の藝く事はおまへん私しの知てる邊の伯母は頭へ十五六貫目から二十貫目位な物と乘て居ります 且「阿房云へト云ふ處へ小妓が來りて 小妓「へー旦那さん 且「オー可愛らしい子ぢや 仲居「是は千代輪さんの妹ておます 且「どういいな可愛らしい者ぢや……衣裳とモットまくて然してれ襦とモット出せ 小妓「モー出せまへん 且「何で出せんのだぢや 小妓「是ら上は昔木綿でおますもの 仲居「其様な事と云ふものぢや無いかな 且「エライ宜衣裳ぢや小

妓「姉はんのと染直したのでおます 仲居「其様な恥のしい事と云ふ者ぢや無いかな 且「綺麗な髪ぢや上手に髪が結てある 小妓「觸手ふては行まへん落ますものいに 且「作り物見たやうな事ぢやアハハハ、と常談と云ひながら酒と飲下居る處へ男藝者が二三人トソソと上ツて來て 男「旦那さん今日は……能うお出せ 且「オー誰ぢや琴八の後に辭儀して居るのは誰ぢや 琴「私しの弟子でおます 弟子「どうぞ御最賃にお願ひ申しやす 且「何ぞ藝があるの 弟「何もおまへん遣ふた金で遣はれますのぢや 且「俳優の物真似でもするの 弟「何れしても同じ聲でおますさうい事を爲ぬ方がましで 且「夫では歌でも謡ふの 弟「甚九が本當に謡へまへん 且「夫では舞でも舞の 弟「カンノノツが六ヶ敷おます 且「夫では三味でも彈の 弟「蹴鞠も出來まへん 且「夫では何が藝ぢや 弟「酒と飲ますぢやお好みなら桶の摺鉢でも飲ますぢや 且「滅相な 弟「五六合飲で跡は鰻飯と食て纏頭と貰ふてコロリと寝るのでおます 且「何方が客ぢや知れん面白い奴ぢや一ツ飲みト云ふ處へ出物置物處と嫌はず仲

居がブーと放屁せり、仲居はハツと思へを塙敷と踏た大膽者もへ素知らぬ顔で澄して居れば主人は臭氣に堪へねて鼻と撮み眉に皺と寄て困り居ると見て流石が仲居も詮方なく梅が香と前の火鉢へ投込で扇と開き夫と煽ぎながら當ひ離れぬ彼の駕籠はと謠ふ 且「仲居どんソリや何と云ふ歌ぢや 仲「これは越中節でおます 且「何處で謠ふ歌ぢや 仲「遊山船で謠ひます 且「さういひな自己や糞船で知らんと思ふた

○眼球の失敗

晝は東客に接し夜は西客に交り、朝に吳客と送ッて夕に越郎と迎ふの不夜城中に上等の二種あり、上等の状は略前章に掲けたれば此に又下等の景況と示さんには貧乏茶屋は表が二間間口にて這入た處に三幅の柿色の門帷あり、油染て居れば冬になつて類透へ障るとツツとするは冷たし、屢脱に打盤の破損たるを置き、内の女房どんは火鉢に横尻として丁寧な持掛ッて居る態は丁度狗子が人力車に敷れた様にして年中頭痛の病通し、梅干の皮と額に張り書留郵便の上封見たやうな顔として

居る、玉の簪是は質の流れと買しなり、買た時に彼方て借り此方で借りて買し玉も其借金に頭に乗て居るに因て夫で年中頭痛と病で居るとは圓星の大當り、併し火鉢が宜しい、先づ機織の玉紋理に總金物、霧の鉄瓶に真鍮の銅臺、ソレ火事だと云へば火鉢と玉の簪とと持て出れば身上と脊負て出たも同様なり、十二三のおチロポが鼻と垂て其鼻と衣服の袖で横に撫るのか癖ゆる衣服の袖は銀色としてピカピカ光ッて居れり、段梯子も市で安物と逐廻して來た品も二階へ上る度にガタ／＼ブル／＼と震へ、棚の梅干しがトン／＼と踊つて落る、二階へ上ると臺が古物なれば一寸踏でも雷に降た雪見たやうに足跡が残る、欄間とて元は三十石の曳船の圖取なれば餘は小首と傾けて考へなければ船とは請取にくい怪しい欄間、床の間にはお多福の女が湯上りと見へ練袋と咬へてボンヤリ立て居る足下の狎がマゴツイて居る掛書、花活は親父が手細工に竹と切た筒の中へ孔雀の尾と二三本さした處はさう見ても流行ない易者の家見たやうなり、締太鼓の裏は破れてマロリと舌と出して居れ

ば其傍に即功紙と張た三味線が考へ事として居るやうにヒン曲ッて掛てあり、ソッポク臺の足は何處への透電して行衛が知れず唐紙や押入の引紐は梅毒ッのさの鼻のやうにスポンと穴が見へ、押入の中の不潔事と云ッたら寝間席の破れたのや大和巨櫛の潰れたのや梭欄箒の役に立ないのや色々の物が雑居して居る、夫のら油染た鏡臺の引出と開て見ると去年の柿の蒂、蠶豆の皮、風と引た按摩膏、なぞ這入て居り又片隅の紙屑籠には竹の皮やら團子の串やら茶碗の破れやら積鼻揮の破れやら種々様々の物が投り込あり、内儀「おチヨボやお肴と此方へ持てお出ヤ……お前また蠅入ず開て何と撮み食してぢや……ナコ牛蒡と黄鶏……黄鶏の方が旨い……旨ふなふて鄙しい事……美味くば一ッおくれ チヨボ「何のお前さんが鄙しい事ト先づ斯の如き有様なり、斯る下等の籠城と攻落さんと進撃し來る其中に一人の遊客ありてトソソソと二階へ上り先づ一通りの酒宴其外の事も済み床へ廻れば敵船は廻へ行て歸り來ず遊客は獨り空床と守りて眠れざるより越方行末なぞの事と思ひてコソコソ

反側として惱み煩ふ折から隣り座敷の歎ち言が手に取やうに聞へるゆゑ開きつゝし襖よりソツと覗くも知らざる娼妓、一人の客と誑惑し 娼「お前はんが一夜の情と私が眞實に受て二世も三世も替るまいと約束したではおまへんの夫とお前はんは酷たらしふ古反にして他樓の女衆に見替なはるとは本に情ないト客に怨みと明石濱、舞子の濱に寝取るゝ、心波たつ須摩の浦、君と幾世も相生の尾上の松と契りしも、漁船の煙と消失し、余所の姫路へ高砂や、曾根の契りと籠給ふ、難面さ君のお心と恨みの數や數へたて、泣いと見れば左にわらず、左の袖にて面と掩ひ、右の手を以て側なる、茶碗の水とば眼に塗て、涙と見せて欺むれば、客は夫とも氣も附ず、コハ親切の誠なり、斯とも知らずニタ心、持し我の薄情なり、以後は斷然慎むべし腹の立しは尤も至極、堪忍せよと眼と細め、三尺ばりの涎と垂れ、謝入る体と見て取る遊客、心の中に大に悟り、人々欺むく狐狸妖婦、茶水と以て涙に代へ、客と欺むく大膽不敵、憎みても尙は餘りあり、嗚呼我ながら迷ふたり、且つ夫れ天の



民と生ずるや、物あれば必らず則ありと、男子は男子の職分あり、女子は女子にて職分あり、娼妓の業と以て、女子天然の職分とは爲すべからず、廉恥と知り節操と守る者の爲すべき業にあらず、又一步進めて生理上より之と云へば、天の婦女に生殖器と賦與するも、是れ子孫繼續の爲にして、男子は精液と妄用して、愉快に供し、女子は淫と鬻ぎ情と商ふの翫弄器具に非ざるや明らかし、合信氏の言に曰く、妓と擁し娼と宿する花柳の害尤も酷なり、身体と傷殘し毒妻奴に及ぶ、自愛と知らざる者誰の爲に之と惜まむと、宜なる哉言や、然らば道徳上より之と考ふるも、又生理上より之と論ずるも、共に得たりと爲すべからず、亂は天より降にあらす、婦人より成るの金言、今こそ思ひ當りたり、嗚呼過てりくと、直に家に歸らんとせしが、思へばく此娼妓、狐狸も畜ならぬ方便と設けて一途心酔の客と欺むく事、憎みでも尙ほ餘りあり、イテく正体と顯はして呉んと、急に茶碗の茶の中へ矢立の墨と絞り込み、ソツと娼妓の側の茶碗と手早く取換たり、娼妓は之と知らずして

恐みの敷と敷へては、袖と以て顔と掩ひながら、茶碗の墨と塗ては袖と拂ひ、又掩ふては之と塗り、塗りつ拂ひつ欺むく拍子、客は思はず之と見て、意外な事に驚愕し客「コレく離衣汝の顔は何したのぢや眼元は一面に墨だらけぢやト云へば離衣は少しも氣が付す 離「妾ひに此様にまで氣と揉してまた其上に顔でもお翳り成さるとは情ないと思黒になつて泣けば客は益く抱腹し客「ナンで譯もないに翳らうぞ論より証據ぢや鏡と出して見たら知れると云ふにぞ離衣は疑ひ晴れぬを懐中より鏡と取出して顔と寫せば個は如何に眼元一面に墨だらけなれば心の中には驚愕したれど流石は老練ぬのらぬ顔で離「餘りお前はんが難面ものぢやさういに眼の黒珠まで泣潰しました

○火災の誤認

某商家の主人息子の放蕩と怒り厳しく異見として遣んと頻に息子くと呼立れと思子は些とも返事せず其呼聲が十度に至つてハイと答へて出来るに主人は猶々怒つて

主人「オイ、モウ是れ百返も呼ぶのに近所に居ながらナゼ早く返事と仕ない 息子、親父さんは彼様な虚言と突て 主人「自己が何時虚言と突た 息子「夫でも親父さんは百返呼だと仰しやるけれど其実はマッマ十返でせう 親「馬鹿野郎が其様なに呼ぶ聲と勘定までして居ながら返事と仕ないとは横着な奴だ全体お前は私しが平生に彼はと云ッて聞せるのに親の云ふ事と聞ないでノソソサ遊んで計り居て家業と怠けるとは何したものだ以來は禁足と云ひ附るからサウ思ッて居るが宜「主に忠親に孝とばなす者と知らずすること誠なりけれ」と云ふ名歌や又忠臣は必らず孝子の門に出と云ふ確言と承知せい又雪堂禪師の語に、世間に住せん人は世上の掟と堅く守り、神明と敬ひ三寶と尊び、主君には忠と盡し父母には孝と致し、上と敬ひ己と顧み、家業と大切に於て奢と屏け、家内和柔し召使ひの僮奴に至るまで愛憐深く、諸親類に交り厚くし、慈悲と本とし、無益の殺生せず、身分相應に困窮人と賑はひ、力のあふふ丈は悲田に施し、先祖の餘澤と忘れず、殊に御恩徳と有難く思ひ、朝暮せず夜

遊びと好まず、今日と喜び、安心に時と過さば是に増たる事おらんや、是れ世間の正路安心の直道なりとあり、れ前も心に籠て守るやうに心掛るが宜私しは是の法談と聽聞に行が今日は誰も居ないから猶更店に氣とつけて留守とせいと支度と聞か出て行は跡に残りし息子と始め伴頭忠入手代源助等皆寄り集り今日は皆留主なれば鬼の留主に命の洗濯とせんと相談し、下男下女に至るまで好みの物と誂らへれば長松は焼芋と好み喰ひながらに持歸り手代源助は豆腐の田樂と誂らへる、其外美酒肴肴席に堆のく大鯛は躍るが如く大平は朝日に似たり、洗杯數巡思ひくに酌酌し、肌と脱あり踊るあり、拳と拍あり謠ふあり、義太夫と語るやら常盤津と迂鳴やら一中節都々一端唄に至るまで興に乗じて謠ひ出つ中にも淨立の長松小僧は火吹竹に火箸と挿て錫杖の代りと爲し難波節齋徳川時代の文句と一調子聲はり上て 長松「昔し亂世の折おらは、二十四天下八天下、唐は大國で、四百餘州に七帝、恐れながら我朝にては、六十六國に一帝、京に天王様、東に將軍家康公、當徳川に従ひし、

大名の数が、九十九久保に百軒本多、大鍋小鍋が七大名で、少將の数が八少將、外様くが十七頭、國主くが十八國主、四天王には、酒井、榊原、井伊本多御三卿、清水田安に一ッ橋、御三家は紀州尾州に水戸様で、締で二百六十餘大名、御旗本は八万騎、威儀嚴重に固めて御座る、國に這入ては、關所と陣屋地頭と番所で固めて御座る、凡そ浦々島々までも、村に這入ては、庄屋年寄五人組、三役人衆で固めて御座る、斯はと嚴重な世の中なれば、世には騒動は無い筈なれど、兎角騒動は色欲煩惱、色と欲とが染分の手綱、色と云ふ字が此世に無くば、若いお女中が紅や白粉花のんざしと、買て何にしよ身は墨染の袖、今昇平のあり様は、弓は袋に刀は鞘に槍は長押し、船は港で治まる御代だ、斯はと泰な世の中なれば、世には騒動はなき筈なれど、色の一字で騒動が起る、お若い衆にも慎み事よ、色と染るなら、紺と染すにザッと水色淺黄になされ、紺と染れば、伊勢は古市町の福圓貢之助が、越の意根の意趣晴し、十人切の、お紺女郎で無くて始終意根で騒動の本よ、昔しが余に五

るまで、變らぬ者は松葉色と月日と出入り、變り易いは秋の日和と女の心、人の女房と枯木の枝は、登りや登るほど、未面白、ボンと折たら銀三百匁、マサカ違へば命にのゝる」などと、色々の藝と遣て有頂天に爲て居る處へ主人が歸り來れば息子も伴當と始めとして周章狼狽限りなく伴當の忠八はは大鯛と懐にして半分は外に出で、手代の源介は大平と股倉に挟む、裸踊りの權助は押入へ頭と突込み頭隠して尻隠さぬの大尻と出す等、誤多くする處へ主人はツカく入り來れば忠八は大汗と流して、是は旦那お久し振で御座います、主「コレ忠八やお前は氣でも違つたのの私しや先刻出て行て今歸つたのにお久し振とは何の事だ殊にお前の懐から大鯛が頭と出して居るのは何したのだ……コレ源介やお前の股倉のら大平が半分出て居るでは無いのナせまた大平なんぞと其様な處へ入るのだ穢いと云はれて一坐は静慮と水と打れる如くになり俄に酔も醒果て青い顔として居るも主人も氣の毒になつて別段小言も云はず夫より火の用心に見廻る處へ類に門口と叩いて「豆腐屋で御座います

す二三丁焼ました跡は追々に焼ますト云ふ聲に主人は驚愕し 主「ナニ二三丁焼たど
ッリヤ大變だト火事支度とする處へ又々「追々焼ますと頻に門の戸を叩けば主人は
益々驚いて火元は何處の見届けん」と行なり門の戸を開る拍子に田樂の香ひがブーン
と鼻を衝ば 主人「コリヤ大變モウ味噌蔵へ火が附た

○飯 捨 の 酬 石

旦那今日は……旦那「オ、誰のと思つたら凡助のドゥした何の面白い事はないの 九
「自己は昨夜女郎買に行ました 旦那「夫は大層意氣な話したお前のやうな不男でも
女郎には持たない 凡「持たのだから脊負たのだから知りませんがイヤモウ女郎買は苦
しいものは有りませぬねへマア斯云話しです聞て下さい……餘り友達が女郎買
くと云ふのら女郎買たア何様な者だらうと思つて昨夜吉原へ行ましたの「吉原へ
行てフア、歩行て女の並んで居るのを見て居ると一人若い男が自己の傍へ来て如
何様くと勤めるのら何程出したら女郎と賣て呉るのだ聞たら若い男が女郎と賣事

は出来ませんが一晚お遊び成さるなら極御安直にして差上ますと云ふのら御安直と
云ふのらにはイッラでも安く買ふのだからと思つて若い男に案内として貰つて二階
へ登りました 旦那「なるほど 凡「二階へ登ると女郎が一人出て来ましたが自己がまだ
女郎買の方式と知らなものであるのら女郎がメットお師匠さん振て初めて逢た自己にお
辭儀も何にも仕ないのです然れども先方は何にしる女郎買の方式とチャンと心得
て居る者だし自己は何にも知らないのだから威張れても仕方がないと思つて自己は
兩手と突てチャンと丁寧にお辭儀としてエ、自己は今夜始めて女郎買に参りました
者で何にも存じませぬのら何ぞ何事も教て下さいと云つて頼んだら女郎がイヤに笑
ひました 旦那「夫や笑うだらう夫のらドゥした 凡「夫のら女郎がお前さんは此處の規
則と知つてお出のと云ふのらイエ只今も申します通り初めて事で何にも存じませぬ
のら何ぞお引立と願ひますと云ふと女郎が夫ぢやア教て上るか此處へ來たら私しの
肩と揉のが規則のら肩と揉で下さいと云ふのら畏まりましたと肩と揉で居ると大

變勞れてツイ居睡りとして頭でコッソと脊中と打たら大變叱られて夫の腰と揉んだと云ふのら足腰と揉たら指の先も何も弱ッて仕舞て些とも利ないし夫に眠くはなるし仕たのらモウ寐のして貰ひ度と云ふと夫ぢやア今夜はモウ暇と上るのら其處へ轉げて寐てお歸り其代り明日の晩に來たら接腹とするのですヨと云ッて其女郎は何處へ行て仕舞たが今朝歸る時に勘定と貰ひ度と云ッて一圓廿五錢取れましたが全体女郎買と云ふものは丸で按摩の稽古お行やうなものですねへ馬鹿くしい自己やアモウ懲々しましたヨ 且「アハ、ハ、ハ、オイ凡助お前は夫はどまで馬鹿では無のらうと思ッたが實に話したね馬鹿に附る藥がないと云ふが本當にれ前の事だ誰がお前金と出して人の按摩としに行ものがある者の馬鹿くしい併し、膝に惚られたが身の因果と云ふ事があるのら振られたお前は果報者だ「曳れなば悪き道にも入りぬべし心の駒に手綱許すな」の古歌と手本とし「花のとき迷ひしも此枯野のな」の句と悟り是のらばモウ女郎買などには行ないが宜、又お前なんぞに此様な事と言ッても了

解まいが雪道禪師の語に、凡夫因果の道と知らず、况んや眞理とや、愚者は樂みと常に求むれども善種子は蒔す、苦は誰も厭へども悪は好んで作る、苦瓜と種て甘瓜と求めんと欲するも豈に得べけんや、自業の因縁とも知らず、患難等に遇ふときは神佛とも恨み、由なき人と咎め或ひは怨害の心と懷き身心と苦しむ、譬へば明鏡の物と寫すに、方圓好醜差はざるが如し、影の曲れると惡まば、形の直らん如し、影と離れて形なく、形と離れて影なし、自ら成して自ら受く誰の咎ぞや、愚人苦に逢ふときは樂と忘れ、樂に遇ふときは苦と忘る、苦のみあつて樂なき事能はず、樂のみあつて苦なき事能はず苦樂等く比び競ひ、苦樂復主なき事と知らず、之と因となして、世々生々苦樂の果と感ず、悲しものらすやと云ふ事がある、然だのらお前も此後は決して女郎買や藝者買に行ふと思はずに一生懸命に家業と勉強するが宜と云へば凡助も大るに感心して凡「ナニ是のらばモウ決して女郎買なんぞに参りませんと云ッて夫のら夜蕎麥買と初めしが或夜半の頃例の通り鍋ヤーキ温飽蕎麥ウイイ

と屋敷町と通つて居ると書生らしい若い人が窓を開て 書生「オイ蕎麥屋一杯温のに
 して呉と云へを既に屋敷の門は鎖つて居るも如何はせ九と思ふとき彼の書生は窓
 ろら手桶と繰下し 書生「オイ蕎麥屋是へ二ツ三ツ入て呉 凡「へい畏まりましたと其
 通りにすへば書生は引上ては食ひ食て仕舞ては又繰下し凡ろ十五六杯も食て仕舞に
 は空然の器と返したばかりで代金と呉ざるゆゑ凡助は頬に聲と張上て 凡「蕎麥屋で
 御座います只今のお代と頂戴ます蕎麥屋で御座いと頻に催促すれど書生は窓と締た
 切で何とも云はず大門へ廻つても門は堅く締つて居れば凡助は大に立腹したれど
 喧嘩の相手がなきも止と得ずフツ／＼小言と云ひながら歸り其翌晩も其窓の下と
 鍋ヤキ温飽蕎麥ツイーと賣て歩行て居るの彼の書生連は尙押強くも例の手桶と繰
 下して 書生「オイ蕎麥屋是へ三ツ四ツ入て呉ト云ふので凡助はへい畏まりましたと
 云ひながら其桶に相當の石ヲ入て 凡「へい出来ましたと云ふは書生はオット来り心
 得たと手桶と繰上て見ると蕎麥と思ひの外大きな石も書生は怒つて 書生「オイ蕎

麥屋此様な石が食るの人と云弄する失敬な奴だと云へば凡助は落附た顔で 凡「へい
 夫は昨夜のイシ(意趣)返して御座います

○井邊の會談

編者曰く笑話無盡藏も己に數章と辨じたれば一先づ是にて局と結ばんとす因て其結
 局のお驗として一風違ひの笑話と並べる事即ち左の如し
 長屋連中の山の神が大勢集り恰も蟻の飯粒にマカルが如く一個の井戸と圍んでメチ
 ヤ／＼ンチャ／＼と會談と始めて世上の事と喧評す、俳優の美醜米穀の相場より以
 て此方の色事彼方の賊難、身投情死經死、駈落間夫犬の産猫の病氣の事に至るまで
 舉ざるなく言ざるなし、犬も喰ざる夫婦喧嘩滋養にならぬ夢の牡丹餅、跡へ戻らぬ
 花嫁の放屁、先へは行ぬ紙袋の猫の評まで殘すべく置郵の命より速のなり、甲あり
 乙に語つて曰く、妾の隣家に夫婦喜しの者あり、如何なる宿世の縁縁の、朝ら晩
 まで喧嘩口論の絶る間なく、此飄ツ床野郎間拔標碌玉活智なしと罵れば又之に報も

るに土多福頼痴奇れ丹珍等の悪口と以てし、火吹竹は破て洗帚となり煙管は飛て雁首と失ひ、摺鉢は席に躍り摺木は空に飛び、鼻血が出たと騒げば瘡が出来たと叫ぶ彼の川柳に所謂る「女房ハイヌ氣亭主のサル氣なり」と云ふが如く鴉の鳴ぬ日のあれど夫婦喧嘩のない日の無さの誠に困った厄介者ならずやと云へば、ツイ其傍に住む兀頭親父の窓より首とツン出し高慢の氣の天と衝き蘇秦張儀が合縱連衡の全うらさると笑ひ孔明周瑜が其君として天下に王たらしむる能はさると嘲り、智の五大洲と籠絡し才の世界と丸呑にするやうな様子にて、彼の兀頭と振一振して、曰く該家夫妻の高藤の我も亦疾より之と聞く、然れども其罪の總て夫婦に歸せり、經に曰く婦と教るの初來、子と教るの嬰孩と、抑く一家の治まらざるの該主不徳の罪なり若し該夫に齊家の徳あらば閨門何ぞ治まらざるの理あらんや、是れ皆其の本と勤めざるに因るなり、大凡そ物みな本源あり然るに該夫の其の本源と詳びらるにせず、己が行ひと猛省せず、徒づらに未派の妻女に着眼す、例へば烟と厭ふて烟りと扇

ぎ、酔と恐れて面と冷し、蠅と忌て之と逐ふが如し、何ぞ其本に歸らざる、影の曲れると悪まば形の直らんに如ず、響きの大なると嫌はゞ其物の觸るに如ず、徒に其未派と責て其本源と顧みざる時は、彼の君子己れに善なるあつて後に人の善と責め己れに悪くして後に人の悪と正すの教に反對し、勢ひ何ぞ行はれんや、到底己れが本源と務むるに在り我身に爪して人の痛さと知るの理と知らば其罪自ら歸する處あり世の諺に夫婦の喧嘩は犬も食すと云へど、向ふ三軒兩隣りの者が皆立腹くは氣の毒なり、皆是れ夫婦が本源と詳びらるにせざるに因る、烟と忌ば火と消せよ、酔と恐れば酒と絶よ蠅と厭はゞ器皿と去れ、本源無くんば未派なし、南風と求めんと欲せば須らく北窓と開くべし、總て道理は一と以て之と貫き曹參の唯も顔回の三月仁に違はざるも、訶葉の破顔微笑するも、皆本源と知るに因る、孔子の必らずや訴へ無のしめんのも、是れ本源の示しなり、其禍ひと未然に察し、其亂るゝと未萌に防ぐ、之と至當の處置と云ふ、衆評如何にと云へば、衆皆手と拍てヒヤク

と一同に賛成す、因て此説は元頭の原按に決せり、而して又丙あり丁に語つて曰く、
 妾の隣家に鰥の住あり、天性篤實の人にして、薪五本と貸は十本にして之と返し、
 酒醬油の類も一合貸は二合にして返し、飯二杯と貸は必らず、四杯にして之と返
 す如く何と貸ても必らず、倍にして返すは誠心な人なり、丁曰く然り、妾も
 亦大に之と賞せり、過日も娘と小使ひに貸と依頼されしもある、之と貸たる處忽ち三
 人あして返したり

笑話無盡藏終

明治廿四年二月廿四日印刷
全 廿四年二月廿六日出版

實價金參拾錢

版権登録 著 者 增 山 守 正
東京市神田區駿河臺鈴木町十六番地

發行者 目 黒 伊 三 郎
全京橋區南傳馬町二丁目五番地

印刷者 松 本 秋 齋
全本郷區湯嶋一丁目十三番地

新潟縣古志郡長岡表町

目 黒 十 郎

發行所 東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地
全 支 店

版權所有

東京大賣捌所

日本橋區新大坂町
小林喜右衛門

全若松町
榑原友吉

全本町四丁目
杉本七百九

全本石町
上田屋榮三郎

全通一丁目
大倉孫兵衛

全通四丁目
春陽堂

全通四丁目
金櫻堂



